

第 17 回高等学校改革プラン推進委員会（第四推進委員会）議事録

1 日時 平成 18 年 1 月 14 日（土）午後 2 時 30 分～午後 6 時 30 分

2 場所 ホテルモンターニュ松本 2 階 「フルール」

3 出席委員

中條 利治委員長	野口 廣子委員
百瀬 哲夫副委員長	小山 勉委員
小口 利幸委員	藤本 光世委員
宮川 正光委員	長谷川 功委員
小林 進委員	鈴木 義明委員
今井 隆一委員	

4 開会

（西牧主任教育支援主事）

本日はお忙しいところ、また足元の悪い中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。本日午前中に開かれました他通学区の推進委員会の時間が延びた関係上、事務局の一部の到着が遅れておりますが、時間になりましたので委員長さん、よろしくお願いいたします。

（中條委員長）

それでは、あらためまして第 17 回の第 4 通学区推進委員会を開催いたします。あらためまして、お足元の悪い中お集まりいただきありがとうございます。

本日は前回に引き続き、お手元にお配りしてあります報告書の内容を確認したいと思います。その前に他地区の状況、それから前回（第 16 回）の当推進委員会開催以降の様子について、事務局から説明をお願いします。

（西牧主任教育支援主事）

それでは、お願いいたします。他地区の状況でございますが、1 月 9 日の月曜日に第 16 回の第二推進委員会が開かれております。そこでは、多部制・単位制高校の配置について、引き続き議論を行い、推進委員会として一定の方向を決めていく時期でもあることから、まず候補案について可否を判断して先へ進むこととし、出席した委員の中で投票を行った結果、候補案の野沢南高校を転換していくことで合意されております。

続きまして、1 月 12 日の木曜日に第 14 回の第三推進委員会が開かれております。そこでは第 7 区の再編について審議されまして、次回結論を得ることとなっております。それから、上伊那農業高校の定時制については箕輪工業高校での多部制・単位制高校に移行することで、合意されております。さらに飯田長姫高校と飯田工業高校との統合についても、再確認をされております。

それから、本日午前中第一推進委員会が開かれております
以上でございます。

(中條委員長)

ありがとうございます。

お手元の資料ですが、前回の確認をした頭のところに黒の枠で囲みまして、第16回推進委員会1月9日での確認内容、これは推進委員の方々だけお配りしてございますが、これについては前回確認された内容まで、ということで、その後で前回の確認内容の確認をしたいと思っています。

それから傍聴の方を含めて、一定程度の原案が配られておりますので、それは前回確認をして修正した部分、例えば二重線で消してあるもの等については委員の方々だけの配布になっておりますが、それを取って実際に近いものということでお配りをしておりますので、ご了承いただきたいと思います。

それできょうの議論ですが、前回に引き続きということで、第四推進委員会報告書の確認をしてまいりますが、前回確認させていただいた内容、蒸し返しになりますが、再確認ということでお願いしたいと思います。

4点あります。議論の蒸し返しではなくて、これまでの15回の議論のまとめとしての整合性を確認しました。また、仮に少数意見であっても、単なる個人的な見解ではなくて最終報告に基づいた内容については、その中であらためて確認をしたいと思います。

それから全員の合意を得られなかった内容は、報告書には盛り込まないという前提で進めていきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

それと傍聴の方にお配りした資料でまいりますと、前回第16回につきましては、報告資料の一番下にページナンバーが載っておりますが、4ページの第11区の要望まで、ここが前回までの確認内容になります。従ってそれ以降については、前回全く検討がされておられませんので、今日以降に改めて確認することになります。それを踏まえまして冒頭私からお願いです。前々回第15回、マスコミの皆さんからの要望がありまして、前回の推進委員会におきましては、これまで我々推進委員会、すべて資料等も含めて公開という原則という趣旨にのっとりやっておりますので、今回もあくまでも原案ということでお配りをいたしました。

それは前回冒頭お話しさせていただいたように、本来であれば、最初の1文字から始まって、すべて確認をして、それをもって報告書作成をするところですが、回数も限られているということもあって、ある意味私のほうで叩き台ということで原案ということで委員長私案になりますが、それを原案という形でお配りさせていただき、全員にお忙しい中目を通していただいて、最初からの確認をその予定でお配りしてございます。

従ってそれに申しましては、4ページの下以降、まったく推進委員会として確認をされた内容ではありません。しかしながら、前回の委員会以降、一部新聞報道におきまして、原案で、まだ確認が挙がっていないという内容。そういう意味では報告書に盛り込まれるかどうか分からないという内容につきまして、具体的には実施時期についての記述ですが、第四推進委員会としての実施時期が1年延期というのを要望するというようなことが、原案という記述はありましたが、報道されたことに対して、大変遺憾に感じております。この場で、一委員として真意に悖るということを強く抗議をさせていただくことをお願いしたいと思います。

本来であればそういう意味では、前回も含めて委員限りとして、最終我々推進委員で全

て合意を持ったものをお配りするというのが本来であったかもしれませんが、冒頭申し上げたような趣旨にのっとって、配布させていただいておりますので、今日できれば最後までいければ、そういう意味では全て確認はの中で終わるわけですが、そういう視点でぜひ傍聴の方々、特にマスコミの方はご理解、ご協力をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

それでは、すみません。傍聴の方は、前回にどこが削られたかというのは二重線、読みやすいように、それから紙面の都合上7行はカットしましたのでちょっとわかりづらいかもしれませんが。委員の方々は、先ほど言いました全回確認までのものを何処を消してどのような文字にしたかということを知るようにしたものを、ダブってお配りしておりますので、そちらのほうも含めまして冒頭、前回の議事内容の確認と、再確認ということで進めさせていただきたいと思います。

まず表題ですが、最終報告に「最終」という文字がいいかどうかについては、また県教委と確認をするということにいたしました。それについては、「最終」を取って報告することになりましたので、ちょっと文章の文の順番を変えて、『高校改革プラン』第4通学区推進委員会報告という表題に変えております。

それからその後、県教委等を通じて、それからの県教委のやりとりの中で、こうしたほうがいいんじゃないか。特に字句、文法上の関係についてはご指摘いただきましたものを参考にして直しました。従ってこの報告書の中には、前回なかったものも含まれていますが、それについて確認していただきたいと思います。

ただし、それぞれの委員の方々から一斉にいただいているものの文章の変更等については、私の一存で変更できませんので、それについては盛り込んでおりません。従いまして、きょうこの推進委員会の中でご発言いただいて、全員の合意をもって変更していくときは、変更していくという前提でおりますので、よろしくお願いいたします。

それではまず1番ですが、「始めに」の漢字は平仮名に直したほうがよろしかろうということで、平仮名に変えさせていただきました。それから、箇条書きのところを除きまして、大きな番号等については、一応段落の頭を行替え1字下げしております。それから1行目文章の1行目ですね。全体では8行目の一番最後、これは前回確認いただいて「命」を「委嘱」に替えております。それからこの行の下ですが日付を本日1月14日、「最終回」を取ったらどうかということもありましたが、これはきょう終わってみてほんとにこうなるのか、もう一度やらなくてはいけないのかということがございます。

それから、それぞれの「出身母体」ではなく、「所属や出身地域」としました。それからその後に、この推進委員会の目的を入れたらよろしかろうという、前回ご指摘がありましたものですから、これは県教委のホームページを見れば、推進委員会への委託事項が、順番で3つございますので、これはその文言どおり、その文言を1番から3番までということを入れております。

それぞれについて、できる限り云々と替えました。それから15行目になりますが、最終報告の最終を取ったほうがいいという、先ほど申し上げた内容と同様ですが、従ってこれを取るという前提で、「且つ我々の思いを込めて報告にするものである」という文章に変更しています。

その次のところ、そこは1字下げまして17行目、報告期間ではなく、報告期限ではない

かというご指摘がありましたので、報告期間を、「報告期限内で」というところで変えてあります。それからその次の行、「無い」という漢字表記を平仮名にしたほうが良いというご指摘がありました。これについては、「決してないわけではない」のところで、平仮名に直しております。

それからその行ですが、「是非提案の趣旨」、これについては「報告」であろうということで、「是非報告の趣旨・方向性」ということで変わりましたものと、それからその次の行、「事務局である」というところを取りまして、「方向性をふまえ、県教委としての云々」と変えております。

それからその次ですが、「真摯な検討」と当初なっておりましたが、これについてはもう少し具体的にということで、我々の報告を受けて実施計画の策定を県教委が担当されるということもありますので、真摯な実施計画の、「の」をすみません、入れてください。「真摯な実施計画の策定検討を強く要請する次第である」と変えました。

それから2のところですが、方向性づけの「つける」というのも、これもやはり平仮名標記のほうが良いというご指摘に基づいて、これ以降方向づけの「づけ」というのを、魅力づけもそうですし、それから魅力づくり、一応個人的には使い分けたつもりでおりますが、「作る」という漢字、「付ける」という漢字については一応平仮名表記にいたしました。

従ってここは、方向づけにあたっての基本スタンス。括弧として（＝当推進委員会としてのコンセンサス）と変えております。

それからその次は、前回確認いただいた番号を、順番に直しております。ちょっと今見えていただいている、推進委員会の皆さん方に見ていただいているのは片括弧のことですが、お配りしたものの。傍聴の方々にお配りしたものは両括弧に変えております。最終的には両括弧に変えます。

今、推進委員の方々に見ていただいているのは、すみません、ちょっと片括弧のままになってしまっていますので、それを両括弧前提でお願いします。1)です。すべての高校に対し、各校の「ポジショニング」を「存在意義」に変えました。それから魅力作りの「づくり」を平仮名表記に直しております。

それから前回、この委員会で確認いただいている内容ですが、「結果論であるが、」を取りました。従って最初は「再編案が」からとなります。その次に括弧内ですが、「魅力づくり」は平仮名と。それから「での論議」が、前回出されて確認いただいたものですが、「論議が域連絡協議会が設置されるなど各地で高まった」と変えております。

それからその次のところで、「ないわけではないが」を平仮名に。それから結果的には「皮肉的にせよ」を取るということで（再編効果）であるということで、「は」を取っております。それからその次の行、30行。「これまでも個別魅力づけ」、平仮名表記です。それからその次の行は、「言っても過言ではない」を変えるということで、「言うことができる」という形になりました。

それから次、2)小規模校化を極力回避する、「従って」を取りました。「我々推進委員会は」から始まります。それで議論の中で「、」がつきまして、「お山の大将」、これもうちよっといい表現がないかというご意見がありましたので、ちょっとこのように変えました。これがいいかどうか、後でご意見伺います。

「高校生という多感な時代に、小中学校時代の狭い世界を越えた仲間たちとの切磋琢磨」

と、いったん変えております。それからその次の次の行、3 行目です。これは前回の確認どおりです。「それが、次代を担う子どもたちへの大きな魅力づけ」、平仮名表記、というように変えました。

それから5行目は、前回お話をして、「そもそも」というのを入れさせていただいて、その次の表は「学級」がダブるということで、学級規模を取りまして、学年、もしくは学校の規模ということで、「学年もしくは学校の規模の論議とは異なる」となっております。それからその次の次ですね。少人数学級はその解決策にはならない。」これが全回、原案の中で変えた方がよからうということで、少人数学級論議で変えた部分で、この次から6行目はカットしたほうが良いということで、二重線で変更してございます。

それから前回鈴木委員から出していただいたものが、その場で確認できませんでしたので、鈴木案ということで「少人数学級云々」から3)の前まで入れました。これは修正原案と鈴木案と併記してございますが、このどちらが良いかを後で確認いただいて、どちらかにする。

一応いただいた中ですみません。ちょっと漢字については最終報告の趣旨に「添って」を「沿って」に直したのと、それから「旧学区」とありますのを文章の中での使い方と合わせて、「エリア(旧通学区)」ということで変えておりますので、ご了承いただきたいと思います。

それから3)所謂「地域校」の部分の2行目、「無くなることを避け」、それから、「そうした高校についてはたとえ小規模校化が懸念されても云々」それから地域高校という言い方を、使い分けを確認しまして、ここで地域校については限定的なので高校名を入れたほうがよからうということでしたので、一応こういう文章にしました。

本通学区では、白馬高校と蘇南高校がこれに該当する。また将来的にも、「そう」を「こう」と直しました。それから4)です。「いやな言葉であるが」を取りました。それから次の行ですが、「針路決定」を「針」から「進」に直して、「進路決定」としました。それからここでは、「ミニ」ではなく総合学制的なでよからうということで「ミニ」を取りました。

それから次のページにいただいて、最初の行に「学校数は」を「現状はでも」の前に入れていただくということ。それから、その次の行に「学校数については」ということでありますので、5行目のところですが、ここにある「学級数は」ダブるというご指摘がございまして、これはカットということで二重線で消しております。

それから6番目、市町村の云々ですが、意見提起を「先送りをせず、」決定後「むしろ」というのが前回入っていたんですが、これはなくてもいいかなということで、クエスチョンで一応括弧をしてあります。決定後も継続、拡大するよう云々とあります。

それから本日すみません。3人の委員の方が欠席ですので11名で確認をしております。事前に検討内容があるかどうかは、意見確認をしておりますので、あった部分についてはご紹介申し上げますが、きょう個別的に神澤委員から「地域プラットホーム」というものを入れたほうがよからうというご意見がございました。文章については事前に私のほうで吟味しましたので、そこにありますように、「そのために、地域や地元企業の人材活用など『地域教育プラットホーム』の形成に向けた、地域の各界からも積極的な支援を期待する。」という文章を入れております。

それから7番は、変更なしです。それから8番については、そこに入れてあります、25

行目ですね。「わけ」を平仮名表記に直しております。

それから3番目、再編案。これは「再編内容」ということで変えました。「結果として」を取った方がいいという意見がありました。これはその後で「結果である」ということで、ダブるというご指摘がまいりましたので、この「結果としては」を取りまして、「最終的に」という文章に変えました。最終的に、特に統合については云々。それから提言等ということに。31行目に、提言の後に「等」というのを入れております。最後「結果である」で締まります。

それからそのページの最後の行です。これは県教委案がということで、前回ご指摘があったものですので、一応「専門的データに基づいた論理的なものであったことの調査でもあろう」という文章でしたが、データだけではないので専門的なデータもしくは検証どちらがいいかを、後で確認させていただきたいと思います。

それから、次のところですが、一応マーキングをして再編案の要望を取り出してあります。ここは現20校のところに全日制ということで、限定したほうがいいという前回のご指摘で、「現全日制20校」、それから傍聴の方が見ていただいているものは、後でちょっと順番の指摘がありましたので、これは直しておりますが、委員会の方は前回同様の順番になっておりますが、それを見ていただくとして、白馬高校のところですが、「白馬高校は…進めるなど地域校としての魅力を高める」という文章で、前回確認をいただいております。

それから最後ですが、「魅力付け」を平仮名表記へ、それから第10区のところについては、これは後で順番を変えておきますが、前回確認いただいた内容を、順番に委員の方々には見ていただいておりますが、その順番でまいります。10区の後の方の括弧がダブっていましたので、これは取るという前回、確認をいただいております。

それから(1)木曽高校と木曽山林云々ですが、ここは学科編成が両校異なることの後ですね。特に「山林」と記載していましたが、「林」としての山林と「高校名」としての山林がちょっとわかりづらいかなということで、「木曽山林高校」という正式名称にしました。

それから本来の施設・什器、民間企業では「什器」と当たり前に使いますが、教育関係では「什器」という言い方はあまりしないというご指摘があり、どのような言葉を使うのかお聞きしましたら、「施設設備」という言い方をされるということでしたので、教育関係に向けての報告になりますので、「施設・設備等」と直しました。

それから前回確認いただいた内容ですが、両「方」を学校の「校」に直して、それから有効的に両方使うということを括弧として、(=ジョイント的)と入れた方がわかりやすいという指摘がされていたので、こういうことでございます。

その次のところは、統合効果が出しにくい「ジョイント的」統合のメリット云々とうところは前回いただいたところです。

それから2行落ちまして、「将来」というのを「今後」さらなる少子化の中で、それから普通科については理数科も含めるということで、記述したほうがいいのではということで、括弧として理数科も含めてということ、それから「ウェイト」については前回確認いただいたとおり「比率」という言葉に直しております。

それからここはちょっと後で、もう1回再確認したいのですが、最後の中黒、丸としてあります。それから下から2つ目です。統合の形態が木曽高校をベースとし、地域中核高校と言うか普通高校と位置付けるというか、これは後で確認します。

それから(2)ここは「ミニ総合学科」の「ミニ」を取ったほうがいいという指摘があったんですが、ここを取ったほうがいいかは前回確認していませんので、そこには「？」を入れてあります。それから推進委員の皆さんへお配りした最後のページですが1行目。「子供達の進路選択の維持」ではなく、「子供達の進路選択肢の維持」と「肢」を入れました。

それから(普通科ウエイト)ここは比率にしました。ここでまた理数科というと括弧がダブリで入ってしまうので、ちょっと入れておきませんでした。ここは上で、うたっていることから普通科のままにしてあります。それからその次の行は、小規模「高」を学校の「校」にしました。それから少人数化の導入検討を要望する。(4)木曽地区はという「地区」を入れました。

それから、「また2校で」ということで unnecessary なものを取っております。

第11区で、前回確認いただいた部分で、これも再確認をさせていただきます。今、委員の方々に見ていただいている(5)ですが、これについて「特に」ということで最初入っていたのですが、この(5)のところを冒頭に持ってきたほうがいいということでそのようにしましたので、いきなり「特に」という文言が入ったほうがいいのかなというようなことで、ちょっと「？」です。他に11区は、多部制・単位制「高校」という標記のほうが覚えやすいということで、最初は「多部・単位制」と入れたんですが、ここを変えております。

それからその下ですね。その下の都市部普通高校という、「高校」という文字を入れました。ここでいう(6)ですが、「南安曇農業高と…」となっていた部分を「南安曇農高校と、穂高商業高校」という形、「専門高校」ということで入れてあります。

それからその下ですが、句点ではなく読点がよからうということで、実践されつつあること「、」また専門「高校」は云々、それから「木目」細かなを平仮名に変えています。それから前回これは確認されている内容ですが、将来的バイオテクノロジーや情報化社会等の進展を踏まえ云々と変えている部分がございます。

ここまでが、前回議論がありましたこと。それから議論を踏まえて、じゃあこちらのほうで文章を考えさせていただきますということで、きょうあらためて確認をいただきたいと思います。それからもう1回、議事の中で、こういうふうにしたほうが収まりがいいかなということはフレキシブルに。その確認を先にさせていただきたいと思います。

では、何かございましたらお願いします。

(百瀬副委員長)

私は前回、原案検討の中で、そしてまた会議後帰ってからあらためてこの原案を読む中で、委員長さん、先ほど確認をされたこと、これはもちろんですが、それと合わせて、私はこのようなことを感じたのですが、皆さんにお伝えしたいと思います。

ひとつはこの報告書を作成するに当たって、これは歴史的な文章で後世に残る、そういうものでありたいと。もちろんそういうことは思うのでありますが、そういった観点からしますと、3つ、私はお話ししたいんですが、ひとつこの文書は県教委あての報告書である。それはもちろん当然であります。同時に県民の皆さんへのメッセージであると、こういうことでもあるのではないかと思います。

そういうことで、教育関係者はもちろんであります。県民の皆さんがこの報告書を読

んで、将来への展望というようなものを、やはり選べるという、俗な言葉で言いますと、元気が出るといいますが、そういった内容のものでありたいと、このように思うわけであります。

そういう意味では、ちょっと原案の文章の中に、説教調のような部分があったり、「残念ながら」という言葉は、今回委員長さんが外していただいたものですから、ちょっとそんな点で、気になったというものでありますので、ぜひそういった県民へのメッセージだと、そういった観点からやはり文章を練り上げていく必要があるだろうということ。

それから、これは先ほど委員長さんの話とダブるかもしれませんが、議論の深まりがなかったことについては、記述をすることはできないであろうと思います。ですから無理をして、記述をしなくてもいいのではないかと思います。

それから3つ目ですが、概念のあいまいな文言というのが、いくつかあるような気がします。そういうものについては、そういった文言は避けていかなければいけないと思います。具体的なことは、また後で挙げさせていただきたいと思いますが、そんなことを感じたものですから、ぜひ皆さんにお伝えをしておきたいと、このように思います。

それから今、前回の部分についても、ここにございますけれども、これについてももう一度読み返して見たのですが、もう少し文章を練ったほうがいいかなというようなことで、私なりにその文章の中身は変えてない趣旨は、変えてないですが、そういう形で変えた部分をまた申し上げたいと思います。

それから議論の深まりのなかったことについては、明記しないほうがいいだろうということで、私としては特に削除する部分があるのかなと、そんなことを感じておりますので、また後ほどご意見申し上げます。

(中條委員長)

今のご意見について、ほかの委員さんから何かございますか。

よろしいでしょうか。

冒頭申し上げたように、百瀬委員が含めていただいた中で、私一存で判断できないことは、この中に盛り込んでおりませんので、そういう意味でできるだけ効率的に、拙速ではなく効率的に議論を進めていきたいと思いますが、これまで納得いただいた内容の中であっても、もし何かあればぜひ積極的にご発言をいただければと思います。

ただし、時間がなくて、できれば全員の合意をもって報告を作成したいということで考えておりますので、できたら最後まで行けたらと個人的なお願いになります。よろしくお願いいたします。

それでは、今見ていただいたところで、そのような趣旨の発言があれば、それは発言として承ることになりますが、最初の1のところ、先ほど申し上げた部分についてはよろしいでしょうか。

(百瀬副委員長)

先ほどいただいた文章の中にもこのように変えたほうがいいんじゃないかというような部分がありますので、細くなる部分がありますが、項目ごとぐらい、1、2というようなことで申し上げたいと思います。

(中條委員長)

そうしましたら、傍聴の方もいらっしゃいますので、先ほど申し上げた内容は二重線のところを行数減らしたり括弧したりして、10 ページぐらいのものがダブって推進委員会の皆さんへお配りされておりますが、こちらはよろしいですか。

(百瀬副委員長)

今の手元にあるものですね。

(中條委員長)

今、百瀬委員が見ているところではなくて、もうひとつのところです。

(百瀬副委員長)

ではお願いします。細かいところになりますが、1 行目の最後から 2 行目、「委員会として」、この文言は不要ではないかと思います。文章をずっと読んでいってみますと。この委員会としてという文言は不要。それからなるべく文章を短く、簡略にするために、そういった部分は私はだいぶ削りました。14 日の最後の、「の最終回」、これもいらないんじゃないかと思います。

それから 3 項目の検討事項ですが、私どもに依頼していただいたのは、要綱によりますと、もうひとつ 4 番として「その他関連事項」という、こういうのがあるんですが、これはここへ入れなくてよろしいんでしょうか。これは追加していくべき文言であると思います。

それからその次の 12 行目、当委員会という、その「当」という言葉を取って、それからその冒頭の本第 4...、この使い分けというのが私もよくわからないのですが、これはなぜ「当」になるのか、「本」ではいけないのか、その辺のところ私自身もわからないものですから、お願いしたいと思います。

それから 14 行目、結論を出すに至りというの、「見るに至り」のほうがいいと思います。それから次、「委託された項目を満たし、且つ我々の思いを込めて...」、というのは、思いはありますけど、これもあえて書かなくてもいいのではないかと思います。

それから次の行 15 行目、「結めに至らずの複数案併記ではなく」、これもいらないのではないかと思います。それからその次の、内容的には次の行、「具体化検証において」という、これも「具体化」と「検証」という言葉の、この辺がつながっているのかどうか、切れているのか、ちょっと読んで意味がよくわからないものですから。それがなくても、内容的にじゅうぶんなものを伝えられているのではないだろうか。

それからその次の、「是非」は、これはなくてもいいのではないか。というのは次の行の最後に、強く要請するという、「強く」というのがありますものですから、くどのような感じがしますのでこのように思います。

1 番の部分は以上です。

(中條委員長)

ほかの委員の方々から他に指摘とうございましたら、お願いします。

(宮川委員)

1 つだけですが、例えば「報告するものである」、「次第であると」という、これは最後に持っていったときにどちらかに統一をする、「この次第である」ならそれで最後に使うという形で、できたらこれがダブるんじゃないかと、「報告する」、あるいは「要請する」で切ったほうが文法的にはすっきりするのではないかと。

(中條委員長)

ほかはいかがでしょうか。よろしいですか。

では、最初から確認していきます。それから今のご意見に対して、進め方ですが、何かご発言ございますか。

(百瀬副委員長)

すみません。もうひとつ。

落としちゃいました、すみません。9 行目、「それぞれの所属や出身地域には拘らず」、これもあえてここへ、こういうことを書かなくてもそういうことで当然、私ども委員というのは来たわけですので、何かこういうことを書くと、余計何か嫌みに聞こえるというか、そういうような気がするので、私はこれはなくいいのではないかと思います。

(中條委員長)

ご意見があれば、先に確認したいと思います。

(宮川委員)

今の事は、それぞれの所属や出身地域と書いてあるのでそれにこだわるみたいですが、単に「地域」という形でいけば、全部困りますから却って大変じゃないかと思いますが。切るなら全部切ってしまうか、先生の言うとおり嫌みの部分があるとすれば、このままでもいいのではないかと思います。

(中條委員長)

ほかにご意見はございますか。

はい、では順番に確認していきますが、叩き台を書いた張本人としても多少の思いも触れさせていただいた上で、ご意見をいただきたいと思います。

少なくとも、私は先ほどのメッセージという意味では、我々推進委員のいろいろ考えてきた思いは、きちんとこの中に書いていると。それが仮に現状離反だったとしても、今後こういうふうに変えてほしいと、それはきちんと書くべきだと考えます。

それが、これが出されたことによってそれに対する批判があれば、それは内容変更はちょっとわかりませんが、きちんと実施計画作成の中に生かしていただければよろしいでしょうし、この中に求めている今後の議論の高まりにという議論に結び付けられれば非常にありがたいし、これが使われる意味はあるなと考えます。

それで、あとその文章はできるだけ同じ言葉を使うよりむしろ違う言い方をして同じ意味にとらえたほうが、かえって平たんにならずにいいのかなということで、要請数を使っ

てみたり、要項数を使ってみたりで、逆にそのように私はしましたので、それがかえってわかりづらい、統一感があつたほうがいいということになれば、それは変えていきたいと思います。

それから、順番にいったほうがいいかもしれません。ちょっと先にお願ひというか、説明をしておきたいのは、16 行目、「内容的には具体的検証において」というところで、方向性、方向づけについては、我々はきちんと議論をして、確認をしてきたつもりです。

ただ、具体例で言えば、白馬高校の2 学級維持をどうするか。それから、蘇南高校で言えば、3 学級と選択肢の拡充、拡大、維持ということを前提に少人数学級論議。それから、少人数でのコース制論議。これは、財政的な裏づけ、担保、支援というものの確認であつたりという部分、あくまでもこれは代表例。ほかにも幾つもあります、そういったものは我々は、具体化という意味で、いかにそれを具現化という部分は、具体化するかという部分は、残念ながら踏み込めなかった。

従つて、方向性に見えるのではなくて、方向性をこれから我々が投げかけて、実施いただく際に、具体化というところで、今一步我々としてこういう形ではこの様になるのではないかということ、これは正しい事が否かは別にして、提案できないということの、具体化検証が不十分という意味で、私はこれを使っています。それがいいかどうかは、百瀬委員のご意見なので、ほかの全員で確認したいと思います。順番でまいります。

それでは、どうでしょうか、これを一字一句やっていくと、今日終わるかどうかわからないのですが、文法上、それから国語上、誰が考えてもこちらのほうがいいですよという言葉は、少し事務局ないしは、肩書で言っていけないのかもしれませんが、例えば委員長、副委員長にお任せいただくと、専門家もいらっしゃるでしょうし、県教委と、文法上、表現上のところについてのみは、確認させていただく。

ただ、どういう文章になるかは、できるだけ今日この場で、すべて皆さんの意見をいただいて、全員賛成かどうかは別にして、ひとつの方向にまとめたいと思いますので、いつも先ほどありました中で、そういった観点、趣旨を中心にできれば確認をして、できるだけ多少時間が延びても、できたら別に焦るわけではありませんが、今日この中ですべて最後まで目を通していただくと、ということへ持っていきたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。はい。ということで、確認をさせていただきます。

そういう意味で確認すべきは、それぞれの出自にはこだわらず、これはある地区では、地元の委員が、出身委員がいないから云々というような、ご指摘ございましたので、我々はこの出身地がどうだから、ということではないということを、皆さんからご発言をいただき、そのご発言を持って我々はこの中で、議論をしてきました。そういう意味で、そういったことに対して私は、文書はあつてしかるべきだろうと考えているつもりなのです。

どうしましょう。ご発言がないと前に進めませんので。あまり書かなくてもいいのではないかと。ではいいですか。直さなくても無くていいという方。

(小口委員)

必要に応じてそこらに書いてありますからね。

(中條委員長)

では、所属や出身地については、あまり書く必要が無かろうということは確かに、私は考えたのですが、あまり使わないかなと思っていたのです。でも、国語的にはちゃんとあることです。

では所属にしますか。中信地区で所属。このままでいいですか。

(宮川委員)

このままでいい。

(中條委員長)

はい。ではこのままにします。

(百瀬副委員長)

字句の問題は、先ほど委員長さん発言していただいた形で最終的にはいいと思います。

(中條委員長)

では、案ということで、入れるということはあらためて。それから、「本会」か「当会」のどちらがいいかは、専門家の意見を伺って、確認をさせていただきます。

(百瀬副委員長)

その辺の、文言は任せていただいて、いいんじゃないですか。

(中條委員長)

では、他動詞的に渡してしまいます。それから、また「是非云々」もいいですね。では、14行目、「且つから込めて」を取ったほうがいい。「項目を満たし報告するものである」これについて、何かございますか。

(宮川委員)

気持ちを込めているというか暖かみがある気持ちを込めるべきだと書いてあるんですよ。平たい報告ではないわけですよ。だったらその文言が、「思い」ではないですか。

(今井委員)

一番後ろに少数意見が出ていますから、その思いをまた。

(中條委員長)

そうですね。それがいいですね。それからいったん。

(百瀬副委員長)

時期についてはいかがですか。

(中條委員長)

それは、私ずっとこだわってきましたが、最後までひとつの方向性を出せなかった場合どうするかとことで、第1回目だったと思いますが、推進委員会の中で、そのときは両論併記でかまいませんということだったので、それだけはぜひ避けたい。とにかく多少不十分という、そしりはあるのかもしれませんが、できればひとつの方向性は、推進委員会として方向性ということにはこだわっていきましたので、文章は別にして、それを報告書の書き方は別として、少なくともこれを書くにあたっての方向づけは、15回、前々回までで、すべて推進委員会として出させていただいたわけですから、そこには少しこだわりが私自身はございます。無くてもいいと、いうことであれば外します。こだわらなければ、いいですか。では後で確認させていただきますが、後で確認しますけれど、いいですか。

では、ここの部分は後で確認します。県教委事務局方も含めて現状協議について、ということで。それでは、次にいきます。2番目のところ。

(百瀬副委員長)

16行目の先ほどの点ですが。

(中條委員長)

私は、そう言いました。

(百瀬副委員長)

具体化においてだけがいいか。具体化検証というそのところが。

(中條委員長)

その具体案が、本当に編集どうかの検証がいるかということ。具体化そのものに。

「具体化を検証」ですか。

(小口委員)

「具体化の検討において」くらいではないでしょうか。

(中條委員長)

それは日本語的にふさわしい、もしくは好ましい意見と考えます。

はい。では、1はよろしいでしょうか。それから1点。3項目でなくて4項目、これは県教委と確認をして、これを出すということにしたのですが、その次から、後で県教委で確認します。その他関連事項は、いるのか否かについてですね。私が聞いてはいけませんが、その他について。

(宮川委員)

「所属や出身に拘らず」という度合い、とらわれないということなのか、国語的にいいのかなと思ったので、「とらわれず」というより、「とらわられない」というのは、どうなのでしょう。

(中條委員長)

それは、表現上ということであるわけですね。

(宮川委員)

はい。

(中條委員長)

2番の(1)で何かございますか。先ほど言ったスタンスというか、観点からご発言になるようお願いします。文章表現、文法上云々とか、この言葉で違う言葉云々は、申し訳ありませんがまとめてファイルか紙でいただければ、それをまとめて、盛り込む方向で、全部取り込めるかどうかは別として、確認という点では、させていただきますので、お願いします。

(百瀬副委員長)

時間がないのですが、申し上げます。

24行目の最後から、ここで遅ればせながらの感もないわけではないが、結果的には「再編案効果」である。と書いてありますが、ちょっとこれも、なくていいのではないかなと思います。遅ればせながらの感がないというと、地域の方々の中には、お互い迷惑になってないかとか、いろんな考えをお持ちの方もいらっしゃるような、気もするのです。ですから再編案の効果とか、そういう再編案についての評価を、委員会としてするというようなことは、どうなのかと思います。

要するに、なくていいのではないかなと思って。その代わり、遅ればせながらのその部分のところを、「各地で高まったことは、住民の関心の深さを示すものとして、評価したい」ぐらいに、文言をむしろ入れると、地域の皆さんに対しても良いのではないですか。

推進委員会としてちゃんと見ていると。こういうことで伝わるとしますので、そんな文章をそこへ「遅ればせながら」の文のかわりに、県民の関心の深さを示すものとして、ちょっと、文言が私も練れてないのですが、そんな意味のことを書いたらどうかなと思います。

それから、「子供達」というところの言葉が、今確かにでておりますが、それを私は、いっそ「生徒」という言い方がいいのかなと。「生徒」というのが、検討委員会の報告書の中では、生徒という言葉が使われていますが、高校生というようなこと、中学生も含めた、ちょっとその使い方によって中学生にしたり、高校生にしたりと、いろいろな形で、子どもたちと、使っているのですが、生徒という言葉のほうが、いいのではないかなといううな、そんなことを思います。

(中條委員長)

ほかは、どうなさいますか。(1)について。よろしいですか。ちょっと、今いただいた中で、どう修正するかは読んでいただいて、(1)の24行目ですが、ここで、「遅ればせながらの感がないわけではないが...」。ここは先ほど、百瀬委員が言われたような文章に変えたほうが良いということに関してご意見があればお願いいたします。

(小口委員)

もうちょっと、全体的スタンスは、かっこよく言えば繊細的なものにするのか、心を込めて泥臭くつくるのかというスタンスの違いなので、それは一言一句全部やってきたのですが、あらゆるところそうしなければいけないという部分、ものすごく時間がかかってしまうので、そこを統一だけすればいいと思います。

私は少なくとも、これまで委員の皆さま方が、知恵を使った中で、心を込めたならむしろ泥臭いほうを支持したいと思います。

(中條委員長)

ほかにご発言のある方。

(百瀬副委員長)

すみません。「泥臭い」というのは、私はちょっと感覚が違う。泥臭いということではなくて、「格好良い」ということでもないような気がして。地域の皆さんの…。

(中條委員長)

物議を醸すようなところは避ける。

(百瀬副委員長)

まあ強いて言えばそういうこともあるのです、私の中では。

(中條委員長)

ここでいえば、高校改革プランの検討は、もう2年前からやっているわけです。それを、既に公開してやってきているわけです。それが再編案があって、初めてある意味盛り上がったというか、その前からあったと思いますが、それはやはり、高校改革プランということの中身は、多分2年間やってきた中で、特に地域校と言われるところは、それが出てから既に場合によったら、再編統合の対象になるのではないかという危惧(きぐ)から、活動を開始ところもありますが、そうでないところは、確かにその段階(再編案が出てきてから)からということが、事実だと私は思います。

従って、決して遅れながら1年遅らすというのではなくて遅れたことは事実であれ、事実には正直言ってそこから議論が盛り上がったときに、やはりとにかく批判は動きよりも新聞見てもあるようですけど、結果再編案が出たことにより盛り上がったということは、内容も事実なのだろうと私は思います。

(宮川委員)

百瀬先生の歴史に残るといふ報告書ということであれば、触れていったほうがいいと思います。せっかく17回ここへ出てきた思いを入れたくて、やはりこういうこの委員長さんからあったような文章のほうが、そのことにあたるんじゃないかなと思いますので、私はそれを取りたいと思います。

一応ここに再編案効果があるというこういう形をつくってあるわけですが、「再編案効

果をもたらすこととなった」とか、そういう形にすれば少しその委員長さんのいう形でいいのではないかと考える次第です。

（中條委員長）

ではこれは、最後に全員の名前が載ります。出自はともかく全員の名前が載っております。地区によっては、ある程度目次が項目だけで時間の関係上、後は該当委員の考え方でまとまるというようなことも、選択肢がないというようなことも、場合によったらあり得るというように聞いていますが、その後我々は、ここに名前が載る全員でこちらで検討して、多少その文言、主義の世界がありますので、そこは全員の主義が一致しない部分があるかもしれませんが、それでも各内容については、各項目については、盛り込む内容については、全員の合意をもって、文字通り全員の名前が添付されて、我々推進委員の報告にしていきたいと思いますので、そういう意味で趣旨を確認して後の文章がこのままでいいのか、ほかに直すところがないか、それは私も何もわかりませんが、今2つのご意見があって、どちらの趣旨がよろしいか決めれば後の議論にも関係するという意味で、もしご意見があれば、ご発言があればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

教員評価検討委員会や、私も幾つか県教委から指名されて話し合いをやりましたが、では、そこまで熱心に動いてくれるのかなと、非常に不満を感じつつ振り返っておりますが。

先生方はよくやられていると思いますが、これだけある程度の期間検討して県民の皆さん、しっかり議論して合意できればいいなと思います。いかがですか、ここまで。ぜひご発言をお願いします。

（藤本委員）

私は委員長さんがつくってくれた文章をできるだけ生かして、お願いしたいなと思います。というのは、ここまで議論したんです。時間がいくらあっても足りないということで、この文章を大事にしながら、もしできることがある場合には、委員長さんと連絡を取り合ってやっていただくことにして、とにかく全体をまず完成させるというようにお願いしたいと思います。

（今井委員）

前回のことについて、とりあえず前回と同じ水準で、これは後ろまで（最後まで）行くということですね。

（中條委員長）

そうですね。それでは文章を変えるまで、確認をお願いします。今の見ている資料で1ページの(1)のところはよろしいですか。はい。それから、(2)のところで、親の立場を云々という文章を、そうなるように小、中学校云々に変えましたが、これでこれの趣旨の違いはわかりますかよろしいですか。いいですか。

それから、(3)で、ご意見として、白馬、蘇南をあえて入れるか、いや入れた方がいい、ふたつのご意見があって、一応地域校のところには、本通学区ではこれに該当すると、いう文章をこちらで用意して入れたのですが、これについてはどうでしょうか。よろしいで

すか、入れても。

それで、後で再編内容のところ、私は意識してなかったのですが、学校の順番。順番というのは、南から順に上がってくるそうです。最初の委員会のほうで、第四通学区各 20 校の魅力づくりの取り組みというのを、配っていただいたのですが、それがその順番にそ

っているのだそうです。特にここに記載している順番に多少漏れがないといえば嘘になりますが、とにかくここに書いてある順番に多少覚えがないと嘘になりますが、特に全部の高校名を入れておきたい趣旨の中で高校名を挙げたのですが、その順番については、その順番に沿っていったらどうかというご指摘がありまして、南からということですから、1 番は蘇南、2 番目が今でいうと木曽高校、3 番目が木曽山林高校、それから塩尻志学館、田川という、こう順に南から北へ上がっていくのが、第 4 通学区で順番なんだそうです。従って、再編内容のところはそれに變更しますので、ここは今思ったのですけれど、それでは白馬と蘇南を逆にしたほうがいいのかないかなという意味です。

では、それからそのページの最後ですね、6 番。1 回は費やして議論してきた地域教育プラットフォーム。これはちょっと具体化というところは残念ながら、委員会の中では詰められなかったというのが正直なところですが、地域教育プラットフォームは、行き着くところ、もしかして詰まるところ、人材雇用ということで、すでに県でも講師を高校へ派遣するとか、それから小、中学校の総合時間ですか、そういう意味では地域のお年寄りに学校へ来ていただき、先生役をやってもらうという取り組みもあるようですので、そういう意味合いからこのような文章にしましたが、ここはよろしいですか。

（小口委員）

県教委からの資料についての論議に限るならいいと思いますが、市民・県民に見ていただくとなるとこの部分は説明をしないと、わからないと思うのではないかと、こういうふうに言われたのですけれど。これについては、ちょっとわかるのですが。

（中條委員長）

一応高校改革プラン検討委員会の報告書の中には、地域教育プラットフォームが盛り込まれていますので、そう意味ではジョイント高校とは、では何だということも、そこではジョイント高校ということで私は使っていますが、そういう意味ではそれも説明しないといけなくなってしまうし、それは各推進委員会も同じだと思いますし、まとめ上げていく過程において、特に広報的な観点からは、県の教育委員会で別冊でしたり、対応いただければと思います。

それから、ちょっと飛ばしますが、3 ページの再編内容のところに、ここまで何かあります。今のところは「こうしてほしい」ということと、頭から 8 までは前回と変えておりません。

再編内容のところ、県教委案云々いうところを、そこに書いてあるような文章に直しましたが、それで前回は鈴木委員からいただいたご意見、専門的データに基づいて論じた云々ということにしたのですが、データだけではないので、専門的検証に基づいたほうが、いいかなと思ったのですが。

(小口委員)

私が言ったのですが。

(中條委員長)

すみません。

(小口委員)

同じ事言わなくてもいいです。

(中條委員長)

申し訳ありません。検証でいいですか。はい、では「検証」にさせていただきます。

(百瀬副委員長)

最終的にという言葉で始まっているわけですね。

(中條委員長)

はい。

(百瀬副委員長)

私が考えてきたのとちょっと違うと思うので。

(中條委員長)

それは、どこをおっしゃっているのですか。

(百瀬副委員長)

それはいいのです。「結果として」という言葉なのに、「最終結果として」というのも文章として変だなと、思ったものですから、私はこのよう順序を入れ替えたらどうかと思って、ちょっと聞いてください。

20行目の「現状をふまえ」という言葉がありますね。そこが「現状」というのは何のことかわからないから、特に高校の現状ということだと思うんですが、各高校の現状を踏まえ、将来云々という、それがちょっと回りくどいものですから、「次代を担う生徒にとっていかに魅力ある高校であるべきかを前提に議論を進め」から1行目に戻って、特に統合についてはその次に、「叩き台」というのは、県の教育委員会が使った言葉で、私どもがそれを使わなくてもいいのではないかと思って、それはなくてもいいのではないかと。

県教委の提示した再編案の近い内容での云々というような。最終合意を見たとき。文章長いものですから、そこでいったん切って、見たで切って、それで検討過程では、地域からの提言等を参考にして、むしろ再編案にこれは、とらわれずといったほうがいいのかもしいですね。むしろ再編案にとらわれず全方位から、多角的な検討を進めてきたところであると。それで、後の結果として再編案に近い形になったというその2行の趣旨は、なくてもいいのではないかと思います。そんなに県教委の案が論理的なものであったという評

価を、私どもしなくて、もっと言えば「よいしょ」しなくてもいいのではないかと思います。

（中條委員長）

別に「よいしょ」をしているわけではありません。

（百瀬副委員長）

私もそれは思うのです。それからその証左でもあるというところまでは、なんといって。そして、その次のまた、というのは、「また」ではなくて、「なお」というようにですね、なお、第四通学区は云々というような文章にしたらどうかな、と思います。

（中條委員長）

一言一句ではなく。イメージとして。

今のご発言内容で、では変えるということによろしいですか。いかがでしょうか。県教委としては、「叩き台」という言葉に結構こだわってらっしゃるんでしたよね。それは、あくまでも「叩き台」であると。我々の案は、あくまでも「叩き台」とあるという実績は考え検討させていただきました。

（丸山教育長）

「叩き台」という言葉は、現在はなるべく使っていないと思います。

（中條委員長）

そうですか。

（丸山教育長）

要するに、当初そのように言いましたが、これは議論の触媒として、お出ししたということです。

（中條委員長）

その触媒はいかがですか。

（丸山教育長）

一番最初に「叩き台」と言ったことで、それが一定のイメージになってしまったもので。

（百瀬副委員長）

ええ。「叩き台」という言葉を使ってきましたのですが、私どもはいいのではないかなというのが、私の意見ですが。

（中條委員長）

いかがですか。これは入れますか。

(宮川委員)

この委員会として使うのであり、構わないのではないのでしょうか。

(中條委員長)

それから、今見ていただいたページの21行目の後半からの文章は、これを取るかどうか。前回の少し違う言い回しを、このように変えたらどうかということで、前回確認いただいた部分ですが、いかがでしょうか。

(小口委員)

これはもし前回でも子供っぽい表現になるのは、やむを得ないかなという個人的にお話申し上げましたが、それが無いと、とかくいろんな論調の中で、行政の出した案は、「御用聞き審議会」、「御用聞き委員会」によって、そのまま通るのが当たり前と、思われている政治に対する興味が少なくないという認識が多い現況の中で、これはぜひ私は埋めていたきたいと、前回も申し上げたとおりだとおりでよろしく願います。

表現は、お任せします。本当の理念はぜひ載せていただきたいと思います。

(中條委員長)

実際新聞でも、前々回終わったところで、内容が県の再編案とほぼ同様の、「てにをは」が変わっているだけの同様と、ありましたが、結果はともかく過程はと、いうところを、我々押さえてきたつもりで、自信をもっているわけですから、そういう意味で、そこは、やはり私はいっておくべきではないかと思います。

それは、文章は含んであります。言い回しについては、専門の百瀬委員のご意見を参考にさせていただいて、ちょっと後で、またメールですか、郵送ベースかはわかりませんが、最終回でOKと皆さんの確認いただく場合は、つくるようにしますので、その中に反映させていきます。

それで、その次なのですが、8つ取り出してあります。これは、その後からくる先ほど申し上げた、学校全般に沿った順番に変えました。従って、2番目に現全日制20校の後に、木曽高校と木曽山林があって、その次に塩尻志学館がという具合に、南から北に順番に変えてありますので、同意をしていただきたいと思います。

これを踏まえてというか、その後が実際そうなのですが、第10区から要請の、先ほどもいいました最南の蘇南からの順番に出したほうが、よからうというご指摘があって、合わせました。

第10区からのところは、前回確認された内容で盛り込んでいるわけですが、その後でちょっと確認しておいたほうがいいものですかと、いうご意見があった議論で、(1)蘇南高校のところですが、「通勤圏に鑑み学級数如何にかかわらず、将来に亘り云々」という。「学級数如何」。言葉として意味が捉えていると思うのですが、厳密には言葉的に、では1学級が存続させるという、本当にいいか悪いかというご心配というか、ご意見がありましたので、それについてご意見があれば、お願いしたいと思います。

それから、ここはイメージは総合学科は、大規模で難しいという、我々聞いた中でやりとりがあったので、そのままそのものであるけれども、総合学科がもっている良さを

生かすようなという意味で「ミニ」と書いているつもりですが、統合をどうするかですね。そんな点でよろしいですか。その辺だけを、前回確認いただいた分ではありますが、再確認して、次に進めていきたいと思います。

ご意見がありましたら、お願いいたします。

（百瀬副委員長）

総括的に書いてある中で、下から３行目に白馬高校はとありますね、これを書くとする、蘇南高校も３学級を維持できるかということは、不安材料と書いておくべきではという議論もあったわけですが。ですから、白馬だけここに書いて、蘇南を書かないというは、ちょっと違う気がする。

私は、白馬高校のことは後で、個別のところ。ここではあえて書かなくても、いいのではないかと。ここで書いているのは、いわゆる再編されていく学校と、統合されていく学校と、現状の志学館とのことです。これは、検討事項というところではありますが、その部分を主としてここに書いているということで、白馬高校は統合するのかなどはないものですから、蘇南高校としてもその部分は、白馬高校の記述はなくてもいいと思います。そのように思います。

それから、第１０区のところで、４ページの一番上に通学圏に鑑み…、これが分かりにくいところから、通学圏という言葉はどういうことか、私なりに考えてみたのですが、それは具体的に考えると、通学圏というのはどういう事かなと、イメージが、私なりに考えたのは。これちょっと、県境域、県境の地域。県境域に立地して隣県からの通学者もあることから、そういうことかなと思いました。ちょっと違っていただらご指摘いただいて、存続させる必要があるというのが結論ですので。その存続させる理由づけとして、通学圏に鑑みという言葉は、ちょっとと思ったものですから。私としてはその言葉が、そんなふうに思っているのですがどうですか。

（中條委員長）

それではすみません。その前に、ちょっと私も飛ばしてしまいました、１ページから２ページのところで、修正案にするか、それから前回の鈴木委員が発言されて、出しておい部分にするか、少人数学級のことで、これを決めないといけないので、見ていただいて趣旨等も踏まえていただいて、どちらがいいかを我々として審議したいと思います。

（鈴木委員）

前回は発言したところと重複になりますが、私の案にある２行目を、見ていただければと思うのですが、最終報告の趣旨に沿って、そういう結果を打開することを第１にして決めました。というのが、我々の、私の本意なのです。小規模校は、立案では県内に２つあるのですが、小さな学校にならざるを得ない学校が、例えば第四通学区には、白馬であったり、あるいは蘇南であったり、現実に池田工業であったり、南安曇農業であったりという、小規模高校があって、それぞれ専門校であったり、地域の学校であるということで、残るという高校になっているのですが、先ほど百瀬委員が言われたように、県民へのメッセージという意味合いを考えると、小規模校が弊害があるということ、言いきって

しまっていていいものかどうなのかということなんです。

小規模校で、でも頑張らざるを得ないという地域の学校もあれば、小規模校であることによって、大規模校にない魅力なり、あるいは教育効果を期待できる、そういう可能性もあるわけですから。私は「弊害」という言葉は、一人歩きといいますか、人にどのように与えるかに心配があるので、取りたいというのが、私の思いです。

従って、そういう形になっているのですが、もうひとつ議論されてきてない部分ですけども、それが何となくもう委員会では、合意ととらえているというふうに思われるのは、切磋琢磨（せっさたくま）という部分がありますが、もちろん最終報告にも切磋琢磨（せっさたくま）ということがあって、前回、今も発言しましたが、切磋琢磨（せっさたくま）確かにこう自身、美しい言葉であろうと思うのですが、大勢の中で磨かれるということが、失礼になって磨かれているのかと、いうことを好印象のこの教育課題などでただし、ちょっとそうではないのではないかと思います。

大きなところで、見れば競争の中で、勝ち組、負け組ができて、これは生徒たち、中には例えば、不登校であるとか、あるいは自信を失うということがある。その結果として学習から逃避してしまうであるとか、いろんな問題点がこの競争、切磋琢磨（せっさたくま）の中の裏側にあるわけですから、それを議論が実はしてこなかった。それはなぜかという、冒頭で言ったように最終報告は、標準6であるという報告を出して、あれは最終報告を地域の小委員会として、さらに具体化検討するという部分もあったので、それは尊重する形で議論してこなかったかと、私は認識しているんです。

従ってももちろん私の案に、こだわるわけではないけれども、小規模校の弊害ということを書くことは、やっぱり問題が大きいのではないかとということと、切磋琢磨（せっさたくま）ということも、軽々に使わないほうがいいのではないかとということから、それを取ったときに、どういうふうになるのかなということで、もちろん委員長の原案にある、その趣旨といいますか、言いたいところというのは、全て私自身としてはクリアしたつもりで書いたのは、私の問題です。以上です。

（中條委員長）

ほかにご意見ございますか。

一致することはないと思うのです。できるだけ小規模校化を、避けるというのは総論としてはある。各論として全てが、では中規模校なり大規模校化ができるかといったら、それは意味がわからないと言われますが、通学という意味でいったときに、例えば小谷村の子どもたち、それから、南木曽の子どもたちが、では木曽や蘇南ではなく、大町、大町北へ通えるのか、白馬の子が木曽山林へ通えるかということが、もともとの再編案もそうですし、我々も後で出てくる、いわゆる地域校という言い方でもって、そこは地理間という日本語そのものの意味はあとで確認するにしても、学級数にこだわらず、存続させる必要があるということは、確認をしてきたと思うのです。

従ってその前段のところは、今後をみたときに、3学級の学校と2学級の学校が平成31年に想定されたときに、その間、そのまま、その2校のままで本当にいいのかということで、我々は議論をする。そういうことが、やはり学科を越えたときには、専門校の議論の中で我々は今やはり、専門校をジョイント的であれ併せることは難しいだろうをという

議論はありますが、同一学科であればそれなりに、併せたほうがよからうというのが、個々の検討の中での、我々委員会としての、発言と言いますか合意された内容であると思います。

それから、少人数学級とか少人数の集団というのを、否定しているわけではなく全くなくて、少人数学級にすれば、学校数が維持できるということではないのかということ、言いたいわけですので、そこはちょっと元々の文章が、分かりづらかったので、その文章はそういう意味で、ぜひご理解いただければと思います。

いずれにしても、この場所で議論するという意味ではなくて、ほかでも議論して、今ご発言いただく内容、私が言った内容も、皆さん十分承知おわかりの上で、では報告書に書く内容に即したらどちらがいいかという、ある意味さらに違う文章ということではなく、この二つの内でのいずれかで協力いただければうれしいかなと思います。

それから個人的に言わせていただくと、あえて闘争を避けるということをしてきた結果が、今企業に出てから、社会に出てから逆の弊害を生んでいます。競争経験のなさ、本当にちょっとした、何でもないハードルも乗り越えられないというケースが、特に若年層には増えていて、それを私は非常に心配をしていますので、なにもかも競争すればいいところを、申し上げているわけではありませんが、競争が全て悪だということは、私はないのではないかと考えています。

ご発言いただいている議論をまとめるだけのつもりでありますので、どちらの意見でもお願いしたいと思います。

（百瀬副委員長）

私も、これ何回も読みましたが、私自身は、少人数学級論議というこの文章、なかなか難しいです。このところは、小規模校化を回避するという観点で我々は考えてきたということを行っているわけです。確かに小規模学級云々という議論がありましたが、そのことにどうしてもここでふれなければいけないかどうか。私はなくてもいいのではないかと思います。非常に過激な発言になりますが、何か取ってつけた、文章のつながりもどういうふうになれば、うまくつながるかと思っているのですが、文章も唐突に何か少人数学級論議が、出てきたと思うのですが、読んだ人は何かなという、うまくそこをつなげる言葉があればいいだろうと思うのです。あえてその論議のことを、書かなくてもいいのではないかと、そのように思います。

（小口委員）

私も同感であります。書くにしても括弧で入れればいいのではないかと思います。先ほど鈴木委員が言われた、あまり論議してこなかったのは確かなので、書くとしても括弧でなお少人数学級論議はということをとということで上の案の2行を取って付けるというか、そのような形を考えています。

(中條委員長)

我々の推進委員会の中で、少人数学級論議、学級集団、学習集団というのは、非常に見解が分かれるそうですが、それを前回1つ目に書いたのは、今回カットしているのですが、要は120人の学年を20人で6学級にすれば、6学級ということで学校は持続できる。60人の学級で2学級にすれば、例えば学級数が少なくてすむだろうと、こういうことではなかろうという議論は、何度も何度も繰り返して、そういう意味での少人数学級論議ではないかと、いうことの確認は私はすべきだと思います。

従って、学校再編が再編だけが内容ではないですが、数の問題、学校数の問題については、少人数学級にすれば89校は維持できる。我々でいけば、20校は維持できるということに対して、では我々が統合するということを、方向付けしているわけですから、では少人数学級があるとすれば、20校のままでいいはずだということに対しては、私は一言ふれるべきだと。そういう意味で、少人数学級にすればということは、質の論議であり、数の論理ということとちょっと意味が違うのかもしれませんが、学年との学校の規模という論議とは異なるということは、唐突ではなく何度も繰り返してきて、我々のスタンスといいますか、個別に各論を検討するにあたっての、ベースとして持っている内容なので、書き方はどのように変えていただいてもかまわないのですが、私は触れていきたいと思います。

(小口委員)

今、ちょっと誤解があるようなので。百瀬委員に言われたのは、そうするといきなり少人数学級が始まっちゃう、鈴木案の場合だという意味に私はとったのです。参考にしていたときに。

(今井委員)

その前の、「そもそも」ではいけないんだね。

(藤本委員)

「そもそも」だと、よく、あとから見るとのことですね。

(百瀬副委員長)

「なお」というような文面ですかね。

(小口委員)

「なお」ということですね、私もそういう意味で、ご検討いただけたらと思います。

(中條委員長)

百瀬委員の言葉は、「そもそも」から下も取った方がよいという意味ですね。

(百瀬副委員長)

なくてもいいのではないかという意見です。どうしてもということになれば、「なお」とでもしてつながるのかなと、「そもそも」としてはちょっとと思ったもので。

(中條委員長)

取る、取らないは方向として確立していかないと、取らないのであれば、言葉をどうされるのか。

(百瀬副委員長)

私は、これはなくてもいいのではないかという意見です。皆さんこれが良いというならば、別ですが。

(中條委員長)

ご意見あれば、お願いします。

ちょっと戻しますが、こちらから決めないと、先に進めないもので、この2案をどちらかということのご発言を、簡単で結構ですので「こちらでいいのでは」という意見で結構ですのでお願いします。

(長谷川委員)

私は結論から言えば、鈴木先生のご意見のほうで、これまでの話の中でいろいろ声が挙がってきたりして、全体として統合し1校多部制にという学校にしていく。これは、もちろん推進委員会の中でも十分話されてきた、そちらが私はどちらかということ、学校の中でも美術科ですので、感覚的ですが、なんとなくこれが前向きに伝わってくるのは、むしろ鈴木先生の提案だと感じました。

確かに少人数学級そのことは確かに、変であれば、逆に次の文章に今後予想される学年、学校小規模校化をから始まって、その文章が終わったところに小規模、少人数学級の論議があったと。最終的には将来においては、高校を統合することが必要であるとの結論に至ったとすれば、まとまるかなと思います。

(中條委員長)

頭の1行ちょっとをさらに。

(長谷川委員)

真ん中を。

(中條委員長)

真ん中。真ん中というと。行数で言ってください。要は、10行目から5行目の頭の文章を。

(長谷川委員)

8行目。

(中條委員長)

「したがって」のところですか。

(長谷川委員)

「したがって」より前ところの。

(中條委員長)

これですね。ほかにご意見。今の長谷川委員の修正案も踏まえてご意見はいかがでしょうか。

AなりBなり案を書ければいいのですが、すみません。

最初の修正案と書いてあるほうで、文章は単なる修正する必要があるのですが、そのほうがよろしいと思う方、挙手をいただけますか。

3名ですか。

それでは鈴木委員の作成した、鈴木案と書いてあるほうがよろしいという方、挙手をお願いします。ではこちらにします。並びは先ほどの鈴木委員の件も含めて、ちょっとあとで考えます。

それでここを終わって、先ほどの再編内容の発言は、白馬高校のところは取ったほうがいいのかということで。それについてご発言、ご意見ございますでしょうか。

(鈴木委員)

この文については、原案が中高連携という言葉を出してきたのを直した部分で前回の論議では、中高連携という言葉は書かないのですが、白馬高校の地元占有率 30 パーセントというところを、なんとか解決してこの地域に学校を残したいという考えがあったということだと思ひ、従って、そういうことを考えれば、蘇南と併記しなくても、各学校を書いていってくれたほうがいいのではないかと思います。

それともっとついでですが、「ミニ総合学科」についてそのままでいいのかなというのが、「？」を取って、かぎ括弧になっていますから、その前に説明がありますので、「？」を取って、かぎ括弧をつけたほうがいいのかというように思ひます。それとその下のところなのですが、通学圏に鑑みという文言も私はよくわかる部分があるのですが、実は、再編整備候補案の中にもありましたように、蘇南と木曽高校は 40 キロ離れています。さらに白馬についても、大町市からは一定距離があるので、これを受けて最終報告にも交通の利便性というものがありますから、それでよくわかると思ひます。

学級数如何にとらわれることがもし反対であれば、一定の学級数を維持しながらと、というような文言にしては、どうかなと思ひます。

(中條委員長)

はい。

(藤本委員)

蘇南高校の通学区に絡めた文章と、6 ページの白馬の部分ですが。

(中條委員長)

ここが問題になれば白馬のところも問題になります。

(藤本委員)

だから違うような気がするのです。

ここで、通学圏に鑑み学級数如何に...の6ページの記述を白馬のところを無くして、ただの通学区に鑑み学級数如何に関わらず、将来に亘り存続させる必要があると。

(中條委員長)

就職の部分ではなくて、その下のほうですか。

将来にわたり、もうちょっと前。

そこは、まあまあ必要があると。通学圏に鑑み学級数如何というところは、同じですよ。白馬もそうです。

(藤本委員)

学級数如何というのは、確か検討委員会の最終報告で、下限が2学級というのがあったと思うのですが。

(中條委員長)

その事は少しあとで、変えるなら、変えますけれど、白馬と蘇南の違いというのは、方向としては一緒ですよと、こうなるんですね。

一応、白馬はあとでやるとして、その前ですね。10区の前の白馬については、先ほど鈴木委員がおっしゃっていたような前提で、前回これをこのままとおす。前回は私が中高一貫あるのみというみたいな話をしたので、ここはそれをなども案、具体的にしろということではどうかと、いうことであります。

それから、ここに盛り込んだ理由は、白馬と蘇南の両方の違いというのがあるのですが、推進委員会として、このままでいったときには、本当に分校化にならざるを得ないという、心配を私たちは非常に持っています。本来であればという部分も含めて、今回はそうはしませんけれども、いずれそうならざるを得ないのではないかと不安なんです。従ってそれを避けるためにぜひ、頑張ってもらいたいということをぜひ私は、盛り込むのがいいということで、これはあえてここに再編という言い方には、当たらないのかもしれませんが、特徴あるものとして、私はここに記述しました。入れるということで、よろしいでしょうか。

はい。続いて学級数如何ということは、他県との流入、流出ということではなくて、あくまで我々は長野県というエリアの中で、この学校が無いと、通学的に受け入れる学校が無くなるということの趣旨を、やはり盛り込んでいるつもりなので、その書き方、言葉がわからなければ、変えないといけませんが、そこはよろしいですか。ご意見があれば、どうぞ。

例えば、言葉がわかりづらければそれは変えますが、意味はよろしいですか。

(百瀬副委員長)

言っているイメージとしては、何とかわかるのですが。

(中條委員長)

従ってその県境にあって、県の「向こうにある」ということではないということですか。

ここが県教委の案と意味合いが同じなので、ちょっと文章の参考にしてもらいながら、もう少しわかりやすくできればそれは考えます。そこはそうさせていただきます。ある一定の学級数を維持しながら、それでよろしいですか。

11 区に入るまでの木曽の部分はよろしいですか。11 区の前回確認をして入れたのを、ちょっと順番が変わっていますので、見ていただくとして、学校の順番というところを、それから各ほかと書いてあるところを、先に書いたほうがよからうということですので、それを冒頭に持ってきています。

6 から順番は、志学館、田川、梓川、松工、それから順番でいくと県陵、ちょっと順番は忘れましたが、やはり所在地における南から、松本市内 4 校を順番一応つけるとするのなら、ここは市内 4 校ですのでそれを入れて、それから松本地区の、明科、豊科、南農、穂高が旧 11 通学区の学校順ということで、書いてあります。

それぞれ全体で確認をいただいたものは、順番が飛びましたので、申し訳ないのですが、13 番目にある南安曇農業高校と穂高商業高校のところで、最後の文章ですが、バイオテクノロジーや情報科社会等の進展を踏まえて、というところで前回は検討をしました。

それから、各方法を頭にもっていったほうが良いと確認をいただいて、それを冒頭にもっていったと、いうふうにしたのは前回の内容です。従って 13 と (5) は文章にすると、今日これから前回確認されていないようですので、この場で確認をいただく必要があります。

ということで、すみません、4 時を過ぎてしまいましたが、ここで、いったん休憩をとりたいと思います。

【休憩後再開】

(中條委員長)

それでは委員はそろいましたので、再開をさせていただきます。

11 区の結論で、言葉遣いがもしあればこのあとまとめていただくとして、表現そのもの、もしか内容そのものとして、こうしたほうが良い、ああしたほうが良いというご意見があればいただきたいと思います。ということで、全体的にわかりづらくなってもいいけませんので、やはり 11 区の(5)ここの部分で、ご意見があればお願いします。

(百瀬副委員長)

この部分であります。11 区の内容の中で、候補に挙らず存続していくという意味では、ちょっとそういう言葉がいかかと思うものですから、その辺はむしろ書かないほうが、いいのではないかと思います。金太郎あめ云々という問題については、個々の記述の中に出ていたような気がします。もうひとつは、関連するのですけれども、田川高校、梓川高校、(7)になります。5 ページ。

(中條委員長)

先に(5)でお願いします。

(百瀬副委員長)

その絡みがあるものですから、それから(9)の松本旧市内4校。その辺は、田川も梓川も含めて書いていって、そしてそれを(5)のほうへ、番号はちょっとずれるかもしれませんがけれども、(5)番の記述をなくす代わりに、そして、私学の役割ということについても、やはりこの地域の場合には、ふれておいたほうがいいのではないかと思います。定数の問題、公私比率の問題というのがあるものですから。ちょっとそういうことをまとめて報告案のところに、順番はともかくとして、今、順番にやっていくということですから、(7)の田川高校や(9)の松本市内4校、その辺がひとつにまとめてそれから豊科高校もまとめて、いわゆる普通科の学校ですので、その部分が委員会の論議の中でも、ほとんど論議がされていない部分なのです。

普通科の中では、明科高校の問題、それについては議論があったように思うので、これはやはりここで自立していいと思うのですが、その他の普通高校については、議論がないわけですから、それはまとめる形で、どこかの項目でひとつの形にしたほうがいいのではないかと、そういうところです。文案もうひとつ。文案は、こういうふうに考えたんですが、よろしいですか。

(中條委員長)

はい。どうぞ。

(百瀬副委員長)

旧11区は私学の果たしてきた役割を考え、公私比率を維持しつつ、ちょっと足りない部分もあると思いますけれども、趣旨はそういうことです。

(中條委員長)

説明をつけると分かりづらいので、いったん読んでいただきたいと思います。

(百瀬副委員長)

この地区は私学の果たしてきた役割を考え、公私比率を維持しつつ、相互に特色ある学校づくりがさらに展開されることを期待すると。その校数というのは、先ほど申し上げた松本市内4校と豊科と田川と梓川を含めた、いわゆる普通科のことを想定して、この地区の普通科についてはというのは、そんな書き出しでどうかと、こんなことです。

(中條委員長)

文案趣旨としてはそういうことです。ではご意見をお願いします。今のご意見に対しても結構です。

(鈴木委員)

文言については、委員長のおっしゃる案とありますが、それを我々も理解して、いっているので今の話で言えば、ここに入るという言葉は、確かに難しい部分もあるのですが、これについても「ないだろうか」というようなことになっているので。

これについては触りですが、基本的にはこれでいいのではないかなと思います。確かに、田川、梓川などについては十分議論していない。ただ市内4校についてのそれぞれの魅力はどうかという議論は、あったように記憶しています。

それで、それぞれ今も百瀬委員が言っているように「元気の出るような」そういう趣旨であれば、各校の名前を挙げながら、それぞれのところで問題意識をもってもらおうということでは、こういった書き方でいいのではないかなというように思います。

ただ前回も話をしたのですが、市内4校で一定の偏差値的な安易な部分もあるとすれば、問題提起として輪切りのところに高校に対しての問題については、関係者の立場でもって議論してもらうことを、期待したいということを一言入れておいて、(6)につなぐというのは、どうかなと思います。

(中條委員長)

(6)というのは。

(鈴木委員)

(5)の下のところ。最後のところに高校教育の問題について、関係各者の関わりを期待したいという文言を入れて、いけばと思います。

(中條委員長)

各議論のところ、今鈴木委員がおっしゃったところが入っているので、特に言葉をとって、いわゆる第3番手、4番手というのはどうかなと、多分何を言っているかほとんどの方、皆さんおわかりかと思うかなと、思って入れたのですが、番号を見たら金太郎あめというのは別に理由づけということではなくて、どの高校も同じ顔をしている、そういうふうにしないとやっぱり、高校の顔っていうのは一つひとつが、変わっていく。私立だけが特色があって、公立はずいぶん地味だということでは、決してないだろうという意味で、「金太郎飴」ではなく、伝わっているようなことを、特に文章のつながりがおかしいなとは思いますが、それは置いておいて、(5)に、別に叩き台を生かすかどうかは、別の問題ですので、中身は変えるなら変えるべきだと思います。

従って百瀬委員がおっしゃっていたのは、(5)に(7)(9)(12)これについては、まとめて個別高校名を出さずに、ということかもしれませんが、まとめて都市もしくは周辺普通高校という言い方で書いたらどうかというような、ご意見もありますが、それについてご意見があればお願いします。

(藤本委員)

私は、基本的には委員長さんのスタイルでお願いしたいと思います。というのはやっぱり今回この再編論議の中で、対象校だけではなくて、他の学校についても議論を続けてきたわけで、最も大事なことは、再編論議の叩き台に上がらなかった高校が、上がらなくて良かったと、関係ない、このようにならないことで、各学校にそれぞれ魅力づくりの責務といえますか、そういったものがあると、という意味で基本的には委員長さんの方向でお願いしたいと思います。

(中條委員長)

中身はともかく、高校名は入れて出す方向で検討するというご意見ですね。

(小林委員)

私は百瀬先生の意見に賛成のですが、(5) は文章が例えば、「我関せず」という部分は直すとして、これを (5) は (6)、(7)、(8)、(9)、(10)、(11)、(12)、(13) 辺りの全体的なことを、書いてあると受けているのです。ですから (5) を切って、そしてその後へ今度はになるか になるかはともかくとして (7)、(9)、(12) それが一ひとつになる。それから (8) とそれから (10)、それから (11)、(12) というのが いう形に、持っていったらどうかと思います。

(中條委員長)

そうすると (5) の中に。

(小林委員)

そうですね。

(中條委員長)

項目立てをして いうような形で、それに関係する高校の記述、文章はどうか別として内容を盛り込んだらどうかということですね。

(小林委員)

そうです。

(中條委員長)

わかりました。

(小林委員)

それからさっきからも出ており、今後も出てくと思いますが、「子供達」という言葉は、「生徒」というような形に、直していったほうがいいのではないかと思います。

(宮川委員)

この論議は、(5)にもってくるのは、この前の時は(14)においてその時もってきたんですよ。

だから結果を、先にもってきたほうがいいんじゃないかと、そういうことで第11区をみんな見通した議論と同じで、このような展開になってくるということで、了解が得られたと私は思っております。ですからこのままでいいのではないかと思います。

ただ文法的に「？」です。報告書で「高校があるのではないだろうか」とか、あるいは「変わっていくのか」とか、こういうのは文章として出すことが出来るのかなと思うのです。私はこの様なことを考えたときに、「こういうやむを得ない方向も推察される」とか、そういう形のもので区切っていくか、あるいは育っていくのかと、そういった可能性のある取り組みの形にしていけないとこれでは少しおかしいと思います。ですから基本としてやっていただく順番は、その前の確認事項で結論を先にもってきて、それからそのようにできたらそういう構成にしていきたいと思います。

(中條委員長)

今の言葉でいうと、意味合いが強くなりますよね。

(宮川委員)

そのような形でお願いします。

(中條委員長)

ではさっきの今回は今先ほど、今百瀬委員がおっしゃっていただいたように、11区については志学館をそのままという前提であると、再編という面からは松本筑摩高校の多部制・単位制への変換。これひとつ。従ってそれ以外は(5)の1番下にあったものを冒頭へもって行って、その中にできるだけ、本当に書く必要があるかどうか、ちょっと議論が別れると確かに思いますが、個人的には該当校以外も一つひとつやっぱり、こういうところはぜひ集まってほしい、こういうところをぜひ、今後取り入れてほしいという観点から、できるだけひとつ一つの校名を上げたかった。

ただ旧市内4校は過激な案をお配りはしたのですが、残念ながら賛成意見がなかったもので、それもたとえとしても出すわけにはいかなかったもので、ぜひ個別の魅力づくりといいますか、それをぜひ考えてほしいという意味合いでそのようにしてあります。ただ使っているところがいいかどうかは、それはまた別の問題です。

ということで、ひとつは該当部分の高校をすべて各高校の中に含めて、個別高校名を出さずにそこに落とし込む。それから本日は、その修正案として同様ですけれども、そこに　　　というように該当校を入れて、記述をしている。もう一つは、このままでという3つのご意見ですが、このままでよろしかろうというご意見を、二つほどいただきましたが、どなたかご意見はいかがですか。

(百瀬副委員長)

先ほどは急いで話したものですから、説明不足のところがあります。私がそういう形でまとめてというようなことを申したのは、例えば田川高校、梓川高校のところは都市部周辺普通高校として、そういう文言が、「都市部周辺普通高校」というその概念というのは、どういうことなのかなと。確かにそこの辺にある学校ということだと思いますが、では豊科は都市部の高校なのかと、それと私が思うのは地域中核普通高校。私自身が、イメージがわからないものですから。それから松本旧市内のいうところの3番手、2番手という。私はこの言葉はやはり正しくないと思っています。

そのように考えてみますと、今いわゆる普通科の学校というものの、いわゆる魅力づくりというのは、我々がどこまで本当にその学校の存立というものの存続というか、そういうものを想定したときに、今まで議論してきたか。議論していないわけです。ですから魅力づけ云々というようなことは、1番最初の論議のすべての直接でなくても、再編内容の概括的に書いたところの3ページの一番下のところに、すべて直接に影響されないすべての高校に、魅力づけの云々とそこに、そのことは一括して書いてあるものですから、私はそういう意味で(7)、(9)、(12)のところを、これから論議する場合、果たして説得力のある内容として、ここへ書けるのかということと私自身自信がない、そういう部分があります。そんなこともあってまとめてあげていいのではないかと、こういうことです。

(中條委員長)

百瀬委員のご意見についてご意見はありますか。 他のご意見でも結構です。

(長谷川委員)

実は私も、年末年始にザッと読ませていただいたときに、百瀬先生と同じ様に感じたのです。例えば都市部においてもそうですし、豊科についてもそうなんですが、中学校が送り出す立場で、いろいろ考えていくときの感じと、ここに書いてある民間といいますか、県民の方とは違うかもしれないのですが、中学校としての進路として選ぶという意識から考えると、それぞれやっぱり特徴があったりとか、個性があったりとかいうふうに、実態がかなり違いますし、それを含めてもし議論をなされた上であれば、ある程度共通点が得られるのかなというふうにとって、出来ればやっぱりまとめたほうが、いいとは思っていました。

ただし、逆に言うと委員長さんの気持ちはよく分かって、ただでは特定の学校についてだけ検討しましょうと、いう進めかたをするかということ、決してそうではなくて、ただたまにたまこうはどうか、ああでしようかとなったときに、意見がなかなか進まなかったことがあったわけで、議論してないわけではありません。

ですので、まとめるかそれかベースにふれたときに、これにふれなければ少しニュアンスは弱いですが、ある程度実態とはかなり乖離するようなところは、あってはいけないうらなと思います。もし後で例えば、市内の学校であったり、豊科であったとしたら、個人的にはこういう印象があるのですが、例えば各校について触れたというニュアンスを残すのであれば、このままある程度残していくということになると思います。

(中條委員長)

「表現は」ですか。

(長谷川委員)

「表現は」です。表現についてはただかなり慎重にといいますか時間をかけなければいけないと思います。

(中條委員長)

できるだけ各高校についての、魅力づくり魅力づけを自尊心をもって、むしろ強制的と
いいますか自分たちだけで出来ないというなら、ほかへの影響も加えながらぜひ魅力づけ
をしてほしい。自発的なものが足りなかったから、今こういうことを我々は議論する必要
があり、県全体の議論も進めてきているのではないかと考えています。

従ってそういう意味で、魅力づくりと魅力づけという自動詞、他動詞的な言葉は、個人
的にはそういう意味を使っているつもりなのですが、ただその際に最初はあまり具体的な
ことを書かなかったのです、正直。書かないと先ほど言ったように、全部これをまとめた
って、全く要は個別の魅力づくりを求める、魅力づけを期待するみたいな文章で、今名前
があがったような高校は、すべて並んでしまうものですから、例えばこれは、理論という
かこの中で、梓川高校も確かに生徒も減少して地域連携について、確か中信地区では、学
校評議委員のモデルとなって地域連携ということで取り組んでいた。その成果もあがって
いると、いうことの確認は我々はしてきていますので、それをさらに進めていただくとい
うこと。それから確かに生徒数は、旧市内校は減っていかないと思います。しかし減らな
いから本当にいいのかという部分を、やっぱりいかに魅力づくり、特徴づけをしていくか
ということは、これからもそういう意味も含めてぜひ考えていかなければいけない。そこ
で入れていくとすると、多少気にいっているのか。言葉的に問題があるような、確かに日
本語になっているのかもかもしれませんが、趣旨はそういうことです。もしまとめるのであれ
ば、個別の魅力づけを求めるみたいなことで、高校がいわゆる普通高校が5、6校並べば、
それでおしまいかもしれません。

ほかにご意見。いずれにしてもすぐ決めないといけないので、ご発言あればお願いした
いのですが。長谷川委員、もしイエス、ノーではなくて、もしこういう形で趣旨を踏まえ
て、個別校名をあげるのであれば、今後の実態に合っているのかどうか、検証しながら文
章表現を検討するという理解でいいですか。

(長谷川委員)

県立高校でその問題どのように解決していくのかということだと思います。

(中條委員長)

はい。それでは個別で言うと、豊科は中学から見ているのではなくて、高校から先をホ
ームページで全部調べたのですが、やっぱり普通高校として、どこの大学へ行くのかとい
うことを見たときに、やっぱりもう少しという部分が、個人的にはあってそういう意味合
い。ぜひ新安曇野市という中で、穂高が専門校がメインで、普通科という意味では頑張っ

てほしいという意味です。全体その中学から見ている魅力というものは、推進委員会のほうへご紹介という意味で、それはしっかりと議論していると思います。

（百瀬副委員長）

先ほどの個別の記述は、先ほどのそういうことですね。実態との乖離、そういう論点がむしろ見えた方がいいと思います。私のどうもない頭では、分かりにくいと、そういうこともあるものですから、それで申し上げたものですから。南安木曾でのそういう文言、そういうものを出していただければ、私はそれはそれでいいと思っている。

（中條委員長）

これと全く違うものが、書けるかということ必ずしもそうではないので、多少使ってはまずいだとか、そういう表現はいかがなものかと、いうことは代えていくにしても、意味合い的なものはここに書いてあることが、こちら側がすべての高校において叶えてくれることはない、と考えていただければ。逆にもし不安があればぜひ出していただいて、それも参考にしながらやりたいと思います。

いかがでしょうか。では別に独断先行という意味ではなくて。

（百瀬副委員長）

長谷川先生。どんなふうに書いたらいいのかというのを出していただければ、ありがたいのですが。

（中條委員長）

それはほかの文章を含めて、意見があればぜひ出していただいたものをまとめたいと思いますので、いったん今の場でこれをやっていると、今まで飛ばしてきたところを、むしろさかのぼらないと不公平になりますから。誰に対して不公平かということ、議論として進行するということに不公平になるかなと。別に。ではどうぞ。

（百瀬副委員長）

いや、いや、ちょっとどういうふうにしたら良いのかと思いますが。

（中條委員長）

ですから長谷川委員だけではなくて、いったん各高校にふれることを前提に、ここに書いた文言以外で、例えば個別にメールか郵送でいただければ、その経緯とかそれを参考にして、最終の文章をつくり出すという意味です。

（百瀬副委員長）

なるほど、そのような意味ですね。

(中條委員長)

それに対してご意見のある方は。ではちょっと議論を戻しますが、(5)を最初にもっていくということは、全体で同意をした。それからできるだけ区分を前提に、あまり物議を醸さないような、前向きな内容を前提にできるだけ個別、個別の高校に対する我々の思いは、伝えたいという前提でよろしいでしょうか。

それからそれとは別に、ちょっと戻しますが木曽高校、豊科、大町、大町北のところは理想はともかくとして地域中間高校という言い方をしています。これについて前回、木曽の部分で少し議論があったのですが、その部分を取ってもいいのではないかというご意見もありましたが、普通というのちょっと意味合いかわってくるので、普通という文章を取ってというご意見もあり、そのままだって入れています。そこをもう1回議論するというのではなくて、地域中間高校という言葉そのもの、確かに県の教育委員会、どこかにそういう言葉は存在しないかもしれませんが、例えば大北地区、それから木曽地区、それから例えば安曇野市ということで、大きなエリアの広い地区ができたわけですから、その中で特に今4校ありますけれども、普通高校は2校だけというのもあるって、その地域の拠点校という意味合いでいいかもしれませんが、そういう学校になるというかそういう意味合いに、ぜひ育ててほしいな、していくべきだなと、そういう意味を込めて、意味をもって地域中間高校という言い方をしておりますが、それが誤解を招く言葉としてふさわしくないということであれば、すべての部分でこれは取りますので、ご意見をお願いします。

(今井委員)

こういった教育問題とか論議するときに、全部細かく言う。例えば弱者強者とかいう言葉を入れましたが、そういう形でいくと弱者というようなところに、焦点があたりやすい論議になってしまうというのが、心配と思っておりますが、ある意味私とすればここで、地域中核という認識をもって、自分の学校を進化させていくというふうがある程度いいかなと思っております。

やはり地域活性化していくために、どうしても優秀な人材を派出していくと、いうことは必要でありまして、その優秀な人材を派出するためのところまでは、書かなくてもいいのですが、やっぱり優秀な人材をどこかで育てていくという意味では、そういう話はより、北は大町高校があり、そういう意味では塩尻志学館がそれらになる可能性もありますし、木曽高校とかいうところ、あるいは諏訪においては清陵があるというところがやっぱり地域にそれぞれあるわけなので。といったところがやっぱりそのように期待をもって、こういった中間高校、あるいは中核高校という言葉を入れていただいたほうが、いいかなと思います。

(宮川委員)

木曽の場合今度は統合という形になれば、そういう名前のものが「木曽高校」とすれば、かなりしんどいと思うのですが、しかし現実木曽全部で見たときには、かなり難しいものもあるわけです。特に私のほうから行く場合ですね、ですからそうものが無くてもすむものだったら、ぜひ無くしていただきたいと思いますし、というのは近くに場合によっては、逆に高校時代木曽高校や北高あるいは大町北だとか、そういう可能性だってあるわけです。

それから魅力づけが成果として現れると思うので、こういう位置づけは中核高校だから大丈夫だというような感じで受けるのか、これが逆の検討をもたらす結果にならないかということも心配しています。

（中條委員長）

ほかにご意見ございますか。

（宮川委員）

ただここで使わなくても、本当に将来、31年、32年になれば、自然に淘汰（とうた）という形で、自然にそういう形のものでなってしまうと考えたときに、出てくるのではないかと思うのです。

（中條委員長）

ほかにご意見ないですか。では使わないということで、よろしいですか。あえてまだ使うという方のご意見は、今井委員と私ぐらいです。ではそうします。あと最後、議論ならなかった(8)松工、それから(10)筑摩、(11)、(13)は前回確認をやりましたのでそれはいいとして、(14)。この辺の内容についてご意見があるか。まず順番にいきますか。(6)ここは「ミニ総合学科高校」で良いですね。

「ミニ総合学科高校」「？」を取って、要はぜひ連携を深めていただきたいということです。だから松工のところは今の工業高校として期待する。そういった「ものづくり」という言葉は、私は産業界だけでなく、今いろんな分野も含めて、今では「ものづくり」について要はブラックボックス化して、海外に全部工場を出すのではなくて、日本でいかにものづくりを回復させるかというところが、非常に今いわゆる製造業的には、非常注目されております。

製造業という意味内容は、高校でいえば工業科ですので、そういう意味でそういったことに連携が考えられるので、そのような意味をもってものづくりというのですが、要はものづくりと言ったのですが、要はものづくりがよくわからないというご指摘がありましたので。

（今井委員）

今メーカーの中で、ひらがなで書く「ものづくり」という言葉が主流になっています。これは設計とかそういった非常に加工において高価なノウハウをどのようにしていくのかとか、いろいろな意味合いでつくられるというので、ものづくりという言葉で、かなり使われているというのが現状でございます。非常に、製造業界では当たり前の言葉になっています。

（中條委員長）

確かに議論の中でも、高校というより大学が、そういうのは育てていますが、コンピュータ上で機械が出来てしまうのではなくて、やっぱり旋盤を使う高校、高専なんか今でもそうですが、そういったところの重要性というのはありますね。要はC A Dで設計図をつ

くっても、こちらから見た設計図面にするので、実際現場でものをつくるのと全然作り方が違うという話もあって、そういう意味合いというような議論は、今まででもそういうことがございました。工業高校はそこはやはり、実際これから団塊の世代が大量に、第2の社会へ巣立ちますけれど、その中には本当に現代の名工といいますが、信州の名工といわれる、呼ばれる方々が、たくさんいらっしゃいますのでそういった方との交流というのが、地域教育プラットフォームの理念かと記憶しています。

（今井委員）

(6)のところ、志学館高校があるというのですけれども、ここだけはいずれ総合学科高校はという記述ですか。

（中條委員長）

ああ。なるほど。

（今井委員）

前後の高校の方針も合わせて、塩尻志学館高校は現状の総合学科制を維持すると、というような文章にさせていただいたほうがいいと思います。

（中條委員長）

ほかにはよろしいですか。(8)ですが、どうでしょう。

（百瀬副委員長）

ものづくりというのは、そのこと自体いいのですが、「...との連携」という言葉が私には良くわからない。ちょっと言葉を補ったほうが、わかりやすいことがあればいいなと、そういうことです。

（中條委員長）

それから(9)、「現状」を取りました。それから不登校などさまざまな環境から入学してくる子どもたちの安心を、居場所という表現が県教委の確か7条だったかな。それを使ったつもりです。

それからちょっと我々の議論の中で、ある意味隔世かもしれませんが、当然そんなことは書かなくても、考えていただけるかもしれませんが、全日制普通科全員の卒業まで、普通科の子供達が転換の犠牲にならぬよう学校一体での取組みを求める。という文言も入れててありますので、ご意見があれば、お願いいたします。

そこまでご意見ございますか。

（鈴木委員）

(10)ですが、全日制全員卒業まですべてがというふうにして、「普通科の」というのをとっちゃったほうがいいかなと、思うのですが、あえて入れるとすれば「全日制の生徒が」ということで、普通科の、を取ってしまうのはいかがでしょう。

(中條委員長)
全日制がある。

(鈴木委員)
全日制の生徒ということですから、今の定時制も普通科ですから。

(中條委員長)
わかりました。そういうことですか。

(鈴木委員)
さらに学校一体での取り組みと態度を求めると、ここに「と」の部分に句読点をつけていただいて県への配慮ということも、意味合いもかぶせながら、おそらく多分実施時期の問題でも、関連しているかなと思うのですが、そこまで踏み込まなくて配慮を求めると、いうところだと思います。

(中條委員長)
今のところまでよろしいですか。それに関連してご意見、よろしいですか。

(百瀬副委員長)
文言 20 行目ですが、子供達が生徒という記述になると思いますが、安心への居場所という。安心というのは人によってそれぞれ異なると思いますので、本当に安心という一人一人の生徒が、こういう場所というものを提供できるかどうかということは、非常に微妙なところなのです。安心という言葉はちょっと使うときに、気をつけないと微妙な言葉かなと。なくてもいいのではないかなと、要するに居場所という、さまざまな体験をしてくる子どもたちの居場所、というところでいいのではないかというふうに思います。もうひとつ先ほど申し上げた 3 番手、4 番手という文言について。

(中條委員長)
それも含めて、普通高校の部分についてもある意味検討しますということで、一応確認いただいております。

(百瀬副委員長)
使うのですか。

(中條委員長)
いや。使うか使わないかも含めて検討します。

(百瀬副委員長)
取りあえず安心しました。

(中條委員長)

教育界の要望として、安心に何か意味があるということでしょうか。

(百瀬副委員長)

いいえ。意味はないです。特に異論はないです。

(中條委員長)

普通安心からくる意味合いで、理解していいですね。

(百瀬副委員長)

ですから安心というのは、心の安らぎということですね。それが人によってこの程度が安心だ。この程度が安心でないという、そういう受け止めの違いです。そういうような心の問題で。

(中條委員長)

別に学校に限らず、職場もこの人にとってはいいのでしょうか、この人にとっては何なんでしょうか、だけど職場全体としてみんなに良くなるように、努力しようというようにやるわけなので、この水準があれば、8割が安心か7割が安心かということではなくて、より高めようとして、例えばほかの高校だったら出なかった子どもが、不登校だった子どもが、例えば多部制の、昼間部か夜間部か午前部かわかりませんが、行けばそこでは仲間を得て学ぶ。要は駅のホームとは違いますから、学びの場にいることで、この学校が存在していくものになってほしいと思います。

(百瀬副委員長)

なんとおっしゃるかわかるのですが、言葉として使うときには何だかよくわからない。難しい言葉だなということでもありますので、これは私の意見です。

(中條委員長)

わかりました。「安心」の代わりに何かほかに、いい言葉はありますか。

(百瀬副委員長)

なくていいんじゃないですか。

(中條委員長)

ただの「居場所」でよいということですか。

(百瀬副委員長)

ええ。

(中條委員長)

ほかにご意見ありますか。ちょっと冒頭の総論にも関わりますので、これもまた一旦そういうご意見が、あったということを認識して、次にいかせていただきます。

(11)の明科高校について内容的にはこれでよろしいでしょうか。

(百瀬副委員長)

今文言的なことと言われれば、それまでかもしれませんが、明科高校のことです。26行目その前からです。この将来を危惧する声があったということではなく、この会の中で意見があったと。いったんそこで切っちゃって、「あったことは学校・地元関係者は大いに認識し」というのは、ちょっと過激かなというようなことで、それはなくてもいいんじゃないかと思います。

その次の行の、「規模を追わず中規模校としての」というこの部分が、ちょっと意味がわからない。ちょっとというかよくわからない。何を言おうとしているのか。の魅力づくりということですね。現在コース制をやっておりますので、コース制の改善等学習指導ということが中心の、やはり一層の魅力づくりを期待するとか、そんなところでどうかと思います。

(中條委員長)

ではそれはご意見として承りたいと思います。ここに書いてある意味は、要は学校ではなく、県教委への報告になりますから、学校への投げかけになるし、県として今の4学級を1学級は体育科に近い学級なのですが、もっと言えば6学級、7学級するということではなく、その今の規模でいかに魅力を掲げるかというのを、ぜひ学校だけではなく、かつ新設運動のときの熱が冷めていないのか、いるのかその辺の地元もあり、それからさらに新設校として、県委の責任という言い方がどうかという、その辺も削減するというのはぜひ考えていったら、独自の事情は松本筑摩だけではなく、明科も20パーセント近い、ということが前回お話をいただきましたが、それについては別に頑張っていってほしいと思います。

大系線という話もありましたし、ある意味篠ノ井線という話も議論のときありましたが、そういう見方もぜひ計画の終わりの頃には、消えてなくなるような状況を期待したいと思います。

それからもめる部分は、最後(14)です。ここは言葉で書く必要があるか、どうかというご意見があるかと思います。いったん3学級の扱いについては、我々の議論では、テクニカルの問題というか毎年の生徒数、進路状況、進学状況ですか、進学ニーズを踏まえてこれまで同様、県教委として専門的な検証をしていくので、すぐにいわゆるというのは我々の委員会での合意事項でした。それが1番ですがいいということで、2番目書いたのが、必要だとか、不要であることであれば、ご意見はどうでしょうか。

(百瀬副委員長)

時間がないのにすみません。

(14)。私はこれはなくていいと思います。それから必要だという意見が、もしあったとしても地元要望としての最後の行が、ここはあってもなくてもいいと。全体としてはなくていいと。入れないほうがいいと思います。

(中條委員長)

ほかご意見。ございますか。

(宮川委員)

私は、あとの2行をここを削除するべきだと思います。

(中條委員長)

理由をお願いします。

(宮川委員)

やはり、至るところから地域要望が挙がってきて、いろんな請願がありました。この1校だけ取りますと、かなりこれが地域要望を我々が受けて、とらえているのではないかというように、とられる心配がある。

(中條委員長)

わかりました。ほかにご意見。あったほうがいいという方、意見はともかく、あったほうがいいという方いらっしゃいますか。

(鈴木委員)

少数意見ではありますが、大北地域についての募集定員が少なすぎるということは、地域の要望という以前に、私は意見として言っていたかと思います。従ってもし入れていただくとすれば、少数意見のところに入るという形で残していただければありがたい。

(中條委員長)

一応、言い方イコールというわけではないですが、少数意見には盛り込んでいます。

(鈴木委員)

ありましたよね。

(中條委員長)

学科学級の配置のアンバランス(大北地区は云々)というような、一応書き方です。

(鈴木委員)

上の「・」は問題意識としてはかなり議論が、あったと思うんですが。

(中條委員長)

これはそのままでいいです。2 番目の「・」を、除するという事でよろしいですか。

(鈴木委員)

はい。

(中條委員長)

いいですか。それでは第 12 区です。ここは順番が先ほど申し上げたように、南からということで池田、実際は大町、大町北なんです、そこは「・」として最後が白馬、という全般に変わっています。まず(15)のところで何かご意見ありますか。よろしいですか。はい。じゃあ(16)、(16)番は地域中核高校というのを、取るということになりましたので。取るとだけでよろしいですか。

(百瀬副委員長)

普通高校だけでは少し変ですね。

(中條委員長)

その文章はあとで考えますので、とにかく「地域中核高校」という言葉は使わないということで確認してもらおうということでよろしいですか、使わないということもよろしいですね。はい。そこは、そうします。新たに入れたのが 2 番目のところですね。

統合後は立地条件などを考慮して、大町高校の校地・校舎も活用する。これは新たに入れました。ある意味我々が、大町、大町北の統合を選択した段階で、結果再編案とイコールですが、そういうものを踏まえて議論してきたので、頭の中では多分皆さんおわかりいただいているとは思いますが、全体が終わってから、ちょっと質問がありましたので、そういう意味でわかりやすくということで、新たに記入をしました。

それからさっきのご意見とある意味同じですが、(16)の下から 2 行目については全文削除をしました。それから統合、ここはそうかなとして吸収合併か対等合併かと議論で、我々委員会の中でありましたが、その括弧内も二重線で削除をしてあります。これについてご意見が、ありましたらお願いします。

(今井委員)

今の 24 行目ですが、必要に応じて検討すると書いてあったのです。その「必要に応じ」というのは、いらないんじゃないですかね。

(中條委員長)

我々がこれだという結論づけまで、できなかったのもまとめはあったほうがいいという、議論はあったのですが、そういう意味でどれがというのは、確定できなかったのも、検討していただいたもので特進コースがいいのか、習熟度別がいいのか、あるいは理数科という単位ですが、理数科をそのままにしてそれとは別に、理数科の特進コースがいいのかという、幾つか案が出されと思います。そういう意味でまたつけたんですが。

(今井委員)

そういう意味では、全体の文章が最後に期待するまでまとまっているので、そういう意味では無くてもいいと思います。

(中條委員長)

理数科転換のというのは無くてもいいですかね。特進コースをどのように詰めるのかそれは議論していない。二重線で消してあるところは、そのままよろしいですか、消すということでもいいですか。それからやや勇み足的に、あえて最後に入れてありますがこれもこのような形で、よろしいでしょうか。

(百瀬副委員長)

今(16)の最後のところですね、「後ろ向きではなく…」というところですね、私はこれはなくていいと思います。まあ言葉がちょっとイメージとすればあまり良くないのではと思います。

(中條委員長)

全文削除、もしくは冒頭の部分の削除でしょうか。

(百瀬副委員長)

全文削除してもいいと思います。

(中條委員長)

ご意見は全文削除ですね、はい、分かりました。ほかにご意見、これはもっと入れろ、もしくは、枕詞を取って、残してもいいんじゃないということでも結構です。

(百瀬副委員長)

すみません。今の補足させていただきます。項目を挙げておくその文章、上に 11 区への流失を食い止めることを、地域一体での自助努力という形にありますが、同じようなことになる。

(中條委員長)

流失を食い止めることと統合効果を挙げることは、違うと思います。

(百瀬副委員長)

違いますかね。地域一体という言葉は本当に、そうかもしれませんけども。

(中條委員長)

思いは、地域一体で頑張っているということです。

(百瀬副委員長)

それはそうなんですけれど。それはまとまりますか。

(中條委員長)

はい。それでいいですか、じゃあそうしょう。

(百瀬副委員長)

もう一点。吸収ではないという意味で云々という。校名の問題ですが、それで私、さっき木曽の部分も説明するのをうっかりしたんですけども、そこまで我々が言及しなくては行けないのか。

当然校名をどうするのかというのは出てくる問題ですので、それはその学校なりきの問題だと思うんです。ですから木曽もそうですけど、「大町仁科高校」などとは入れないほうがいいと思います。

(中條委員長)

それについてご意見、いかがでしょうか。

(野口委員)

木曽でも、それは同じ事が言えると思います。

(中條委員長)

具体的な動きが挙がっていないかどうか、挙がっていれば書くんじゃなくて、委員会で校名をどうするかという意見が出されて議論があって、それについては本当に必要があるかどうかを、地元の関係者で確認していただきたいということで、我々は確認をしました。従ってそれを、木曽と大町のところで書いたつもりです。それは当然のことで書かなくても、当然だから当たり前ですけど、当たり前の議論として地元で起こりえるので書かなくともよからうということが、百瀬委員のご意見です。

(宮川委員)

つまり木曽でも書かなくてもいいのですか。

(中條委員長)

それは当たり前の議論ですよ。

本当は大町高校と木曽高校だと思うんです。地域でだいぶ差がありますから。それだと対等か吸収かというような議論あったので、挙げておくことについては、よろしいですか。当然のことがほかに、この部分だけでなく、当然のことを我々がもしかしたら書いていくかもしれないので、じゃあここはぜひ必要であれば検討いただきたいということで、括弧内へと進みます。それから最後のところは、枕ことばを取って統合効果を云々とします。

(17)、白馬高校。ここは先ほどの蘇南のところと同じ、最初に言ったところですが、ある一定の学習云々という言葉に、ここも変えます。それ以外のところでご意見があればお

願います。

（百瀬副委員長）

願います。32 行目ですが、学科編成のところですが、この辺のところはこういうような形で、委員会としての合意といいますか、そういうことになっているのかどうか、私としても記憶にないのですが、なかったような気がするんですが、観光、福祉、ペンションというような具体的な言葉が、出ていますが。

白馬高校の地域が検討して白馬高校の将来像の中でも、福祉というようなことは、なかった気がしますし、ぜひその辺はやはり学校と地域、もちろん教育委員会もお願いしているわけで、そして検討していただくことになって、我々が同じ具体的なことを考えない方がいいのではないかというような気がするんですが。どうでしょうか。

（中條委員長）

ここの思いは、今まで地元で検討されてきたことは承知しています。がその結果として、3 分の 1 の子供達しか通学していないというのが、今の実態です。従ってこれを「しろ」ということでなくて、いろんなアイデアを投げかけて、ぜひその中から今までとは違うことも含めて検討していただきたいという趣旨です。

そうしないと本当に白馬は、2 学級を維持できずに何年後にはもしかしたら分校化しないかというところを、我々は非常に危惧（きぐ）するというのが、大北の方向づけをした議論であった。従ってその危機意識というのを、きちっと明記するというのが、そのときの議論であったと記憶しています。

ただ観光とか福祉という言葉はありましたが、ペンションについては議論としては、出されていませんけれども、せっかくペンションがあって、後継者確保に困っていらっしゃるような、ペンションもあるやも聞きましたので、だったら日本全国から募集なり、単にスキーの募集だけにするだけではなくて、ペンション経営を白馬へ行けば学べるとか、いろんなアイデアをぜひ検討をしてほしいことということで、ここは残しておく形にはしておきます。以上です。

ご意見を願います。普通科 2 学級を維持するということは、我々議論でも確認していますので、ここは済んでいます。

（百瀬副委員長）

存続を 1 学級、2 学級の議論になっていく。

（中條委員長）

だから 1 学級でも 2 学級でもいいですけど。普通科 2 学級の中に、いろんなコース制をぜひ検討していただきたいと思います。

（百瀬副委員長）

それなら 1 学級になっても。

(中條委員長)

では、ここを議論しますか。

(百瀬副委員長)

そこまで議論していない。

(中條委員長)

では「普通科2学級とし観光、福祉、ペンション経営等…」これはあくまでもエクザンプルですから、というように変えさせていただきます。よろしいでしょうか。はい。

ほかに特に、次ページの「・」について議論は分かれていると思いますが。

(宮川委員)

「残念ながら…」というところですが。

(中條委員長)

じゃあ次のページでよろしいですか。

(宮川委員)

まずいですか。

(中條委員長)

いいです。いいです。

(宮川委員)

「残念ながら」を、取ったほうがいいと思います。「子どもたちが」にさせていただいて、「喉元過ぎれば」という気持ちはわかるんですが、やはりここは「今回再編の対象にならなかったことに甘えることなく」にさせていただいた方がよろしいのかなと思います。

(中條委員長)

今のところは7ページの頭の、「残念ながら」を取るということと、2行目の最後のところ、再編対象にならなかったことがというのが、今のご意見。

(百瀬福井委員長)

今のところでしょうか。

(中條委員長)

今の部分をお願いします。

(百瀬副委員長)

(17)ですか。

(中條委員長)

はい、(17)番ですが、(11)今の、「喉元過ぎれば云々」と、いうことについてご意見。そこに今回再編の対象とならなかったことは甘えという文章にしたかどうかということを含めて、こういう文章になっています。これでよろしいでしょうか。ほかにご意見。よろしいですか。

「残念ながら」を取ることで、では「生徒と子どもたちは」のところは、あとで確認をします。私は思いを込めての子どもたちとしたのですが、別に生徒として構わないところですが、あとでいずれにしても合わせます。

(小林委員)

「明記するものである。」とするのでしょうか。

(中條委員長)

すいませんそこはあとでやるとして、「喉もと過ぎればという」表現先ほど宮川委員が言った内容に合わせるということによろしいですか。はい、そこは確認をさせていただきます。今回再編の対象にならなかつたことに甘えることなく、このような文章にします。

(百瀬副委員長)

そうですね。「甘える」というものちょっとと思いますが。

(中條委員長)

いや「甘え」的」とします。そこの部分で、ほかにご意見、小林委員おありですか。

(小林委員)

(18)ですが

(中條委員長)

一番下ですね。

(小林委員)

「明記する」ということで良いと思います。

(中條委員長)

どこか言葉尻に期待するとか、そういうものであるとか、そこは合わせた方がよいというご意見もあると思いますがそれは含めて。そこから本論のところまではいかがでしょうか。よろしいですか。

それでは最後(18)です。ここもという言い方の大北地区で、3に係る「高」を学校の「校」に直しています。それから、他責のあとを、取ったほうがいいたろうというご意見が、多分おありだと思います。これは私のほうで、流失は他校の調整区の存在というふうに、手元はなっています。「せい」という言い方で、他責(流失は過去の調整区の存在)で、11

区の。それから「校化」が、変換を間違っていますので、「効果」に直していただきたいと
思います。その部分削除ではなくて、その中身はいらないよというご意見があれば。

（百瀬副委員長）

10 行目ですが、また地域場で残念ながら、その文章でやはり地域の皆さんが、どう
いうふうに思うのか、つまり一体感が感じられないというか、私どもがそういう判断をし
ていいのかどうかということで、私は入れないほうがいいと思っています。

それからその次の、他責からずっと 4 校維持の前まで削除して、4 校の前に地域におけ
る 4 校、これ維持じゃなくて存続と言いましたから、存続活動のエネルギーを云々と、そ
して最後のところは、連携による統合推進をする。

統合推進というか統合と言葉を入れてみてはいかがかと思いました。

（中條委員長）

ほかにご意見ございますか。

（宮川委員）

私は「残念ながら大北全体としての一体感」という言葉は、これは地域の住民にとって
はかなりの厳しいというか、逆に比べようがないですね、ですからもうちょっと柔
らかい言い方が、ないものかなと思います。

文章が思いつかないのですがそのように思いました。

（小山委員）

私は、地域全体で考えなければいけない事だと思うので、今、百瀬委員や宮川委員が言
われたような事で、いいのかなと思います。

（今井委員）

正直言って、残念ながら大北地域全体としての一体感が強く感じられない中で、その
1 行だけやはり取ったほうがいいかなと、いう気がします。ただしいろいろと、ここでの
提案をいただいた中でも、過去にも中心地域があったとか、クラスの割り振りを増やせば、
生徒が確保できるという考え方が、非常に強く感じられましたので、そういった面では、
以下の部分はきちんと書いておいたほうが、いいと思います。

（中條委員長）

ほかにご意見ございませんか。これはあくまで個人の感想ですが、我々が検討して大町
と大町北という案がありまして、その中でこういう内容にしたわけですけど、それ以降
例えば白馬は、先ほど甘えているという言葉がありましたけど、乗らなかったらのういい
やという雰囲気は私は感じています。

そうではなくて、あれだけ我々が危機意識を、持っていたことをぜひ、今本当にどうこ
うと言うことを、申し上げているわけではないですが、やはり全国募集すればということ
ではなく、地元の子どもたちがいかに魅力を感じているか。さっき大系線だ、篠ノ井線だ

とありましたが、地元の子どもたちは、学校の様子を日頃観察、否が応でも毎日見て、感じているはずです。

従ってそこで感じているものもあれば、行ったり行かなかったりと、いうことも多分あるんじゃないかと思います。そういう意味で明科は残念ながら、白馬を下回る進学率ということなのですが、白馬に限らず地元の子どもたちが、本当にあの学校へ行きたい、お兄さんと同じ高校へ行きたいというふうに、ぜひ関心をもらえるように、「残ったからいいよ」では絶対にはいよう取組みをお願いしたい。

じゃあ3つに分けて、池工は池工として活動する、大町は大町地区として活動する。それから白馬は白馬として活動する。じゃなくて大北としてどうするか、やっぱり流出をいかに止めるのかであると思いますので、そういう自然の流れのなかでも、子どもたちが来てくれるというように、これは学校だけでは出来ないことが実際ありますし、それから本当に自分でこれをつくりながら思ったのは、木曽では中学に対してもっと大北というか多いと思っていましたら、8 中学しかない。その何とかが連携のとりやすさ、さらに松本市内で連携をとるなんて、無理に決まっているのですから、少なさを生かすということ、ぜひ具体化という形で考えてほしいと思います。ではここは外します。「またから、で」までを外します。

それからすいません、予定時間が過ぎましたが、せっかくここまで来たのでやらさせていただきます。申し訳ありません。

4 番。実施時期について。少数意見、少数は整数、少数の少数です、少ない意見ということです。いただいた意見で実施時期に絡めて、冒頭このことに若干触れさせていただきましたが、1 年、最低でも1 年は延ばしてくれというご意見。それから3 年というのは、今の中学生達が動機付けされるまでには3 年というご意見だったのですが、そういうことは個人的には理屈が通らない、なぜ中学1 年からなのかという理屈が通らないので、だとすると高校に入った1 年生が、それを前提にして入ってきてはいない子どもたちがいるとすれば、同じ3 年という理屈づけとしてここに入れましたが、実施時期については、ここまで明確な議論になっていくかどうかということも、それぞれ思い起こしていただいた上で、どう書くか数字的なものも、入れましたがそれでいいのかどうか、個人的には、試案でお配りした確論のほうが、いいかなという気がしていたんですが、前々回ですが、議論した中ではやはり、納得してからということからすればできれば「用意ドン」のほうが、いいのではないかとご意見のほうが、むしろ強かったように感じましたので、そういうふうに記述をしました。

いずれにしても我々が、決められないものがあって、あくまでそもそも論のやりとりを県教委とはしましたが、ここは我々の要望事項であるという認識が、前々回議論としてされていますので、そういう意味で、言葉遣いはともかくとして、一番強く要望したいとの意味で、強く言いました。最後は、要望事項であるということである程度書いてあります。

25 行目ですね、平成 20 年度の実施と書いてあるのですが、平成 20 年度以降実施ということで以降を入れました。前回お配りしたものと少し変えてございます。それではこれで終わりにします。

(鈴木委員)

実施時期については、最後のところで議論するというのがあったり、事務局でも案が我々の任務ではないということもあって、十分な議論ができなかったのですね。例えば筑摩の多部制・単位制をいつから出発させればいいのかということについても、そのことについてもどういう準備が必要なのか、落ち着いて議論をしながら、もしかしたら何年にできるという議論があったかもしれないですね。できなかったというのは実態なので、私の意見とすれば...

(中條委員長)

その中にひとつは、テクニカルの問題も含むので、推進委員会ではなくて県教委として、検討するという意見もありましたが。

(鈴木委員)

そうですか。だとすれば24行目「方法論として...から考える」までは、カットしてくれたほうが、議論の実態ではないかなという気がします。「方法論として個別実施はありうるが...一斉実施が望ましいと考える」これはカットしてしまったほうが、いいと思います。

ついでに発言しますが、県としてのことでありで我々の議論ではないということになっていますが、一番最初に戻りますが、我々の課題として3つの課題があって、その他に関する事項というところがあって、再編する前にどういうことを、議論したということを含めた、第4番目の議論だったと思うんですね、さきほど委員長が4つまで入れるかどうかとの関連ですけれども、4つまで入れておいて、この実績においてもきちんと。

(中條委員長)

鈴木委員の理解は、4 その他関連事業も含まれるはずだ、というご自身の意見ですね。

(鈴木委員)

そうです。

(中條委員長)

それを前提としたときにと、いうご発言ですね。「その他関連事項」に、何が含まれるのかというところの確認ですね。ただその他に含まれたとしても、再編して実施時期については前々回、我々は県教委とのやりとり、ご発言を踏まえて、ではどうするという中で、強い要望としてここに盛り込もうということになりました。

ただ個人的には何とか、文章的にまとめたいのですが、思い出しながら見ているのですが、ひとつの案になっていないんですね、たくさんあって、この3年が望ましいというご意見がある、それからここにも書きましたが、時間を掛ければいいのかというわけではない、というご意見もある。それは考えられていることは当然であると思いますが、やはり必要最低限の検討期間を持ってぜひ実施をしていきたい。それが実施をすることが、子どもたちにとって、いかに魅力を与えるかを、我々は議論し、検討してきたのであって、その結果その方法論として、統合でありひとつの学区としての再編としての、いろいろな方法であ

り、それを早く実施してやるのが、我々の検討結果を子どもたちの未来の表示につながるだろうと思います。

ということでそれは、必要最低限の時間を十分とって、もしくは必要最低をとった上で、いかに実行してもらうかは皆さんと同じだと思います。その大前提の中で、じゃあ1年は最低延ばすべきか、3年間で掛けるべきだという、幾つかのご意見の中で、それを元でひとつの方向ではまとめられなかったのが、最大公約数的にいうと語弊があるのですが、そこで皆さん、そうはいつでもここはそうだよということ、確認いただけたかなとニュアンス的にいえば、少なくとも6月の下旬に、県から県教委が再編案として提案をいただいたものから、すでに1月中旬ということで、時間がたっていて。

例えば議論でも出ていたのが前期選抜等をどういう高校名でやるのか、統合準備が今この段階でこれは報告ですから、これを受けて県として、実施計画策定にあたって更に先にさらに統廃合を周知なり連絡をしたときに、もう物理的に間に合わないだろうと、いう意味で最低1年は、必要最低限としてその1年は延期して平成20年度ではなくて、少なくとも22年度以降でなければ、まとまらないのではないのかというのが、文脈的にうまくつながっていくか、どうかですが、意味合いはそういうことです。

（百瀬副委員長）

私は今基本的には、県教育委員会の考えで実施時期の問題は…。

（中條委員長）

それは前々回にも議論しているので、結局我々の要望としてあるのだと、県教委の範疇であるということを、我々十分理解しています。

（百瀬副委員長）

そういう意味で、21行目から「…1年間は延期し」までを削除して、その代わりにあっさり、「そのための準備期間を考慮すると平成20年度以降の」と。つまり1年間いつから始めるから検討してくれとか、そういう依頼は受けていない訳ですね。我々の判断で、いつから始めるという言葉は使わなくていい訳ですから、平成20年度以降といえばそれでわかることですから、そのための準備期間を考慮すると、平成20年度以降の実施とすべきである、とこの辺は、私どもの意見を述べてももちろんいいけれど、あまりすべきであるというようなことで、縛りを入れるというようなことはいけないし、出来ない。望ましいくらいが、そういうことが望ましいとこのくらいで、あとはこのようなことがあるので県教委が適切に判断すると私は考えます。

（中條委員長）

どこからどこまでを削除するのですか。

（百瀬副委員長）

21行目の冒頭から。

(中條委員長)

文章で出してください、私の手元では行数が出ておりませんので文章で。

(百瀬副委員長)

21 行目の「県教委の再編提示」から。

(中條委員長)

21 行目の県教委の再編提示から。

(百瀬副委員長)

そこから 3 行、「...1 年間は延期し」そこまで削除して、その代わり、「そのための準備期間を考慮する」とし、先ほどの「すべきである」を、「望ましい」とそういう文言にするべきではないかなということです。

(中條委員長)

ほかにご意見ございますか。

(宮川委員)

少数意見のほうに、先ほど委員長がおっしゃったものが、大多数の意見になったように、私は思っているのですが、どうもいつの間にか少数意見になっている、ちょっと皆さんに確認してほしいと思いますが。

(中條委員長)

決して悪意を持って、自分の意見と違うから押し付けるということではまったくないのですが、「大多数」とは私は、とれなかったんですが。

(宮川委員)

少なくとも反対というわけではなかったと思いますが。

(中條委員長)

多分 3 方ぐらいが、それに合意をしたかもしれませんが。個人的にはできるところからということなのか、全部一緒にしなくてもいいのという感じではなかった。

ほんの少し強い意見がということで、ふんふんとうなずいていらして、長谷川委員でしたか、ピーク時から見ると、もうここまで来ていて、次の代につないでいくにしても、こういうものを入れ、何をもっていくかという検討を含めると、再編案提示から我々の検討期間をもてば、最低でもってという言い方でこちらから見ていると、皆さんふんふんという感じかなと、見えたものですから、本当は一つにまとめていただいたほうが、書きやすいのですが、ちょっとそこまで書けるのかと感じております。

意見としては分かっていますが、これをこの中に盛る意味があるのか、他と同じようにこの次に取り出したほうがいいのかちょっと悩んで、勝手に言い回しを変えましたが、次

に入れたので。ただ要望として、両論併記はしないと言いながらも、そこはひとつにはまとまらなかった。それは我々の結論づけという部分で見るとということならば、中にこう両論というもので、いろんな案を盛り込んでもいいんじゃないかという、もしかしたらご意見もあるのかもしれませんが。

そこは、たぶん多少勇み足フライングしてでも、書きたいということもあったことを踏まえると、別にこれまでのもの以外に、今日来ている傍聴に来ていただいている皆さんを含めて、特に今までかなり文言確認やっています。そういう意味でちょっとある程度そういう我々の要望としても責任として、どういう書き方があるかはぜひご意見いただきたいなあと思います。

言葉尻を取るようですが、強くすべきであると言っても、そう取っていただけない可能性もあるので、だとすればいきなり強いことを書いておいたほうが、いいかなと私は思っています。そのままで良ければ。

（吉江高校教育課長）

よろしいですか。

（中條委員長）

はい、どうぞ。

（吉江高校教育課長）

本来、事務局が、あまりお声をかけてはいけないので、しばらく、静観させていただいておりましたが、いろいろこれについては議論があると思っております。正直申し上げて、それでいままでの推進委員会のやりとりの中では、できるところからは、やっていいんじゃないか、というようなご発言もあったということも、私承知しておりますし、あるいは1年を送って、あるいはもう少しというようなご意見も、あるかと考えています。

先ほどからお話にございましたように、私どものほうとしますと、もちろんこういうようなご意見も、トータルで考慮した上で検討するというスタンスは変わっておりません。しかしながらこちらのほうに、例えば先ほどございましたように、すべきであるという内容表現が望ましいとか、例えば最後のほうに、県の要望というような表現が出ておりますが、それについては私どもといたしましては、委員会からの要望事項というような報告を、させていただきたいと思っております。

そんなこともありますので、できればそのような意味でも、少し幅を持たせたような内容にしていいただければ、ありがたいかなと、事務局としての発言です。

（中條委員長）

我々はあくまで要望する立場ですので、いろんな意見をひとつ一つに書くといっても、やっぱり委員会と議論をしてきたわけですし、それなりのある程度、AでもBでもCでもEでも、これじゃあということではなくて、やっぱり何度も方向性が出る論議をするために、それは何が1番の要求って書くものなのか、できれば皆さん、ただそうは言っても、それで採択をするべき問題でもありませんし、そういう意味でいけば、ほかの意見につい

でも入れては併記をする、どう入れるかは別にして、載せておくということは、可能なのかなということだと思います。

幅を持たすという、吉江課長のお話を始終伺っておりますが、幅を持たせる意見は残念ながら、前々回まではほとんど賛同が得られなかったもので、そっちの選択理由は、そこは記入削らせていただきました。ただ今日の場でそういう意見があれば、賛同の意見があるという意味で、それはむしろ含めて文章を書いていけばいいのかとも思いますが、お願いします。

(鈴木委員)

わかります。

(中條委員長)

せめて3年は送れよということで、私のさっき印象は先ほど申し上げたとおりですが、3回からいわゆる。3年分。

(小林委員)

私がさっき言ったのはその中身というか、人数的なことはあまりこだわらずに、ということと言われたんですが、いわゆる利便性の人数的なことというようなことはあまりこだわらずにということ、委員長さんから言われたんですが、私は3年ぐらいはと、いうことで言った記憶があります。

(中條委員長)

すると足りないみたいですね。ある意味、少数でなくて複数ですか。

(宮川委員)

19年度実施になっているのではないかと思います。県は、19年から移行案決まっているのではないかと。

(宮川委員)

推進委員というのは何かなということと言わせていただければ、検討して出すのに、私たちの意見としてはこうだということを出さなければ、問題をあいまいにしてくださいというのをそのまま出していたら、何やっていたのっていう気がするんです。

例え厳しいことを書いても、別にそれは県教委を責めているということじゃなくて、私たちとしてはこう考えるという態度をみせて、こういうものだとご理解いただいて有るべき報告書を作成すればいいんじゃないかなと思います。

(中條委員長)

当然理解した上で、ただ3年で皆さん全員が同意したかということ、決してそうではなくて、中にはいくら県教委案とはいえ、内容には実施出来る部分だってあるよ、校舎は設置してあるということで、むしろ実施してからやることのほうが多いと思うんです。

ですから、そういう意味では申し訳ありません、決定事項ではないという前提で、採択という意味合いというか、まだすべてを取っていませんで、ちょっと印象だけ申し上げてほしいんですけども。勝手に言うてはいけないので、そこから必要があればで欠席された方々にも、確認をしなければいけないかもしれませんが、少なくとも今日出席されている中では、5名の方が、できたら3年ぐらいを入れてもいいんじゃないか。ただ県教委とすれば、いやそうではないと、そうではないということをおっしゃいますので、ひとつの方向ではないというのは、ご理解いただきたいと思います。

ただ必要があると両論併記ということで、まとめたくはないというようになっていますけど、実態としてそうなので、幅というか、複数案という意味では少数からその他の意見として、そういう意見が出されています、というところを盛り込んだほうがよろしいですね。

（藤本委員）

今日、実施時期について、当委員会として何年度以降をとというけれども、年度を入れる必要があるかどうか。

私は、委員長さんが言われたように、我々はより魅力有る、そういったものを議論してきたんだと、という気持ちが私もあるのですが、どの位たったらそういうことができるかということは、各学校の事情とかそういうものがあると以前申し上げましたが、各学校で体制づくりとか周りへの説明にどのくらいの期間が必要なのかは、ちょっとわからない部分があって、先ほどの当該校努力と県教委の専門的な判断力と助言援助を踏まえてできるだけ早く決まるという形もあるんじゃないかなというふうに私は思っています。

（中條委員長）

ここでちょっと議論の蒸し返しというか、当然皆さんご意見がおありですし、それからひとつに言って今の場合でも事実でしょうし、そういった意見を踏まえて、我々の要望としてどういう形が望ましいのか、という前提で議論をしないといけないので、そういう意味で2つに絞るという両論ではなくて、藤本委員のおっしゃった意見を含めて3つ、4つあれば、それは加えて書かなければいけないかなという気がしました。ほかにご意見あれば。

（今井委員）

現場の中学生、実際にどういうふうにかえるのかと、言われましたね。やっぱり早く形を見せてあげないと、いけないんじゃないかと思います。現実には今日これで、筑摩の定時制を、全日制のほうやめますよっていう方向を出したと思うんです。たぶん今回の募集についても影響がすぐ出る。そういうことだと思うのです。

それで大町とか木曽についても、やはり同じ現象が起こると思ってますので、やはりそれも当人たちのことを考えると、やっぱり早く形を示していかないと、と私は思います。

それがただ物理的にやはり、準備できないよと言うところはわかりますが、ただ例えば募集をやめるということは、我々早くできるのではないかなあと思っていますので、やっぱり一応確かに向こう3年たってという部分よりも、考えもわからないわけではないんだ

けど、でもやっぱり現実に今の小、中学生、2年生3年生がどういうふうに判断するかな
という、そこは早くこういう形になりますと、いうところを県教委としては、かなり導
入して仕上げるというふうに思っております。

（宮川委員）

今、統合って、実施の時期は何年かあるんですけど、実施の時期はいつになるにして
も、これ出て行くわけです。当然県教委からこうしますというのが、出るわけで、だから
例えば少なくとも3年ぐらいかかっちゃうから、そうなるってことなんで、その方向を示
してはいけないと、いうことではないんです。

（中條委員長）

方向が出ることによって、子どもたちが例えば統合がいつから開始されるのか、統合さ
れるのがわかれば、それに対して早く実施したほうがいいよというのは、子どもたちのこ
とを考えると、今井委員も今のご意見です。

（宮川委員）

私もそうと思いますが、それはどう考えてみても、今の状態であれば難しいのではないで
しょうか。

（中條委員長）

その上で3年が必要か、1年でいいのか、来年度案どおりなのかと意見は分かれると思
います。

（宮川委員）

わかりました。

（中條委員長）

子どもたちが不安がっているかもしれませんし、何か動きがあるから、あの高校の行く
のは、やめようっていうのは思ってはもらっては、逆効果なんです、例えば統合効果と
いうのは、「GO」がかかってから初めて、統合効果の上げるための準備を進めるとするん
です。内々でというか、水面下でやっていることできると思うのははっきり言って、ほと
んどなくてむしろ統合がスタートしてからの話で、現場の様々なぶつかり合いがあって、
それをなんとか乗り越えてもらってという、やっぱり早いに越したっていうことは、あ
りますがそれが拙速ではなく、かつ地元が反対しているのに本当にいいのかっていうのは、
やっぱり我々が、実施計画組んでいく県教委がそんなことできるのかということ、きちと
責任責務をはたして、そうは言ってもということで、ある町の町長が、多部制・単位制を
反対されたんですが、多部制高校にするということで、やるのなら日本一の多部制・単位
制高校を、目指そうという記事が載っていましたが、そういうむしろいかに効果を上げる
かというところで、より効果を上げるかということが必要であると思います。だからと言
って早くやれといくことではなく、そこでの検討期間が重要だということで議論がありま

した。

それであるについては、あくまで県の問題なので、一切それについては報告書には盛り込まないことを、決めた推進委員会のあると聞いていましたので、それはそれとして我々は、考えていこうということであると思います。ということと言うと、結論が出てくるのではないかと思います、3つぐらいありますが、幅を持ってということ。よろしいですか。

それから最後、少ない数の意見、決して小さい意見という意味ではありませんので、ここに取り上げたもっとあってそういう意味でいくと、最後のところはこれは上に持っています。複数案の中に入れていきたいと思います。

高校再編を前提として云々というものは、4番にもって行きます。従って順番が付けていないのがいけないのですが、6項目挙げておりますが、少数意見を組み込んでいるのは、項目立てで前回確認させていただいたと、ということからいきますが、内容としてこれ以外、むしろこれは不要というご意見があれば、お願いします。

（百瀬副委員長）

前回の会議の後、もう一度読んでみた中で、少数意見というのをここで取り出して書いたほうがいいのか、あるいは各論の中へ、それぞれの学校の記述のところへ組み込んで、こういう意見もあったというふうに書くということとはできないのか。

少数意見を少数意見というけれども、これわざわざ取り出すと、何か寂しいような、取って付けた、こういう少数意見もあるんだよというような、こんなふうに軽く見られということはないかと、そんなことが頭をよぎりまして、それで各論のところへ書くということとはできないのか。

（中條委員長）

最初にこれは前回申し上げたとご説明したように、最初のところの項目だけは入れてありません。むしろ言葉をお借りすれば、取って付けたというようにならないように、あえて少数意見ということ、我々は大事に議論してきたというつもりで、ここに書きました。それからほかに入れたらどうかということは、我々の責任として果たすべきものは果たす。従って要はひとつの方向性に導き出すべき議論についてです。そこに書いてしまうと、何が結論かわからないようになってはいけないので、かといって「ポッと」付けて、あの後それから、少数意見を無視するということではなく、どういうまとめ方がいいのか、少数意見という文言がいいかどうかは、意見をいただきましても、私自身は、ここにまとめたほうがいいかなという思いで、ここに書きました。

取り上げられるべきが、本当にこれで今、一応議事録全部見ましたけれども、もしかしたら、漏らしたもの思いとしては、2、3では異なるものもあるかもしれませんので、そこは可能性という意味で書いてあります。

取り上げるということは、よろしいですね。よろしいですか。はい。では、取り上げるべき内容。

個人で言えば、もっとこの部分があったら楽なのにと、当然皆さんあるとは思いますが、一応私が見たいというよりは状況を見て、多少はという意味ですが、いやこれは一人の意見じゃないかとか、ほかにご意見ありませんか、少数意見。

少数の方々が、賛同されているとおっしゃる意見がもしあれば。

（百瀬副委員長）

ダブっているっていう意味では、10行目の明科高校の将来展望の明確化これをこんなような文言が、あったような気がするのですが。

（中條委員長）

するとななくてもいいですか。

（百瀬副委員長）

ええ。

（中條委員長）

どうでしょうか。そういう意味では、白馬高校の大町地区高校の分校化、これも白馬のところ、我々の提示、資料。それは入れると思うんです。

（百瀬副委員長）

そこにありますね。

（中條委員長）

逆にその上は、先ほどを取りましたので、ここで表記をするということで、その部分に入れます。

それから文面が違ってはいけないので、大北4校を当面維持し、統合案は地元の選択に委ねるという内容というのは、後で問題があってはいけないのです。そういう意味合いで3校を維持するということは、我々として結論付けをしました。ただどういうふう組み合わせがいいかは、地元委ねたらどうかというご意見が、あのときは確か多数決ではなくてひとり一人どの案が良いかを聞いた上で、決定した中で、3案だったと思いますけれども、複数案のご賛同があったという意味で、ずっと以来この4校を維持しているというところの点では、決してそうではないということです。そうすると白馬と明科を取ったほうがよろしいですか。

（今井委員）

明科は取ってもいいと思いますが、白馬については統合案という中で、大町と大町北という前に白馬高校を分校化して、要は白馬を統合するかどうかの審議がなされていたので、このことが少数意見でもありますので、そのような認識を持っております。

（中條委員長）

統合案のひとつとして、採決に至らなかったけれども、統合案のひとつとして検討した。ほかにご意見。明科を削除はよろしいですか。1番最後のところと明科のこれは削除します。削除と意味は既に個別のところ、同じ文言が書いてあるという前提です。

それで、白馬については、本文にもそういう将来的な危機っていうのは書いてありますが、そういう意味合いではなく、統合案を我々が決めるにあたっての、ある程度大きなウエイトでのご意見として、最終的にはなっていませんが、あったということもメリットに入れてここに取り出します。以上ここはいいですか。

では最後、まとめに代えてというところで、ご意見。ここではちょっと行数が、すみません私のものと変わっちゃっていると思いますが、2 つ目の段落で「S」と書いてあるところが「昭和」に直してありますが、その次の、次のページですが、新たな伝統づくりに、ひらがなにということで、「作り」をひらがなに直しました。

それから1番最後、これは最初私が勝手に書いたものですが、私個人としての思いを書きましたが、最終的にはこれは全員の名前をつけ、委員会としての報告になりますので、最初から削除することを目的に対して、入れさせていただきました。これは4行はざっと読んでもらっていいです。それからその上の最終報告となっています。

(百瀬副委員長)

文言的の記述ということになるんですが、23行目なんですが、木曽東高校の統合であり、ちょっと文章長いものですから、「ある」でいったん切って、その結果現在の木曽高校が云々と、「真摯(しんし)な取り組みの結果として、今日に至っているのは」っていうのはちょっと意味がわかりにくいものですから、そのむしろ真摯(しんし)な取り組みを、私は成果があると木曽高校に、統合という中でそういう成果が現在あると。それで「。」

(中條委員長)

高校再編の成果としてということですか、真摯(しんし)な取り組みの成果として。

(百瀬副委員長)

「いずれにしても結果として今日に至っているのは」というのは削除して、取り組みの…。

(宮川委員)

結果、結果というのは削除してもらって、整形すればいいのではないのでしょうか。

(百瀬副委員長)

ええ、そのこと、なんとなかなと思います。メモしたのを見直してみて、申し訳ないです。

(中條委員長)

ほかご意見。よろしいでしょうか。すみませんちょっと戻りますが、これまでの進め方一応ご賛同いただければということで確認させていただきます。

文章について、先ほど委員の方々の幾つか出していただいた意見ございますので、できましたら文章場合によるか、もしくはコピー印刷したものを、県の教育委員会でよろしいですか。提出いただいて、それもできるだけ、かつすべて盛り込むということは無理かも

しませんが、ひとつの方向性を持って、もしかしたら、こちらの通りに従うということもあるかもしれませんが、最終の文章をつくらさせていただきます。その上で特にものすごぐこだわる部分は私と、肩書的には委員長、副委員長の責任で確認をさせていただきます。その上でファイルベースか郵送、印刷物ベースで、全推進委員の方々には、また県教委から配布しそれを確認をいただいて、それでよろしければ、それをもって、我々としての最終という意味は、何度もやってきての次が最終ですけれども、第四推進委員会の報告書とさせていただきますと思います。それはよろしいでしょうか。

一応、体裁は今日やったものと、それからほかの推進委員会の報告書と、多少こう合わせる部分があるのかもしれませんが、そういう意味では今日確認をしておりませんが、今日お配りしたものとしては、今確認いただいた内容の後、委員会の名簿です。我々の名前、それからその後に、我々が17回までの結果ありますが、これまでの第1回から17回までの審議内容、本当はもう少し細かいほうがいいのかも知れませんが、議事録等は遅れながらも4通学区全て県で作成し、公開されておりますので、そちらを参照いただければと思います。それと、後は表紙をつけて製本するような形になるのではないかと思います。その上で体裁を整えて最終版として我々第四推進委員会としての報告書として県の教育委員会へ提出したいと思います。従って提出までは、(案)という形になりますので、各委員の皆様から、「これで良い」との確認をいただきまして、(案)を取らせていただいて、来週末から再来週にかけて県教育委員会へ報告書を提出すべく作業を進めたいと思います。

これまでのところでご意見はございますか。従って、これが確認ではなくすでにいただいているものもございしますが、ご発言いただいたものの確認を含めて、ぜひ、ファイルか印刷物で県教育委員会へ早めにお寄せいただければ、それを踏まえて、来週前半あたりにお願ひしたいと思います。全員ということではなく、ご意見のある方はお願ひしたいと思います。

(宮川委員)

我々としては、直したものは送ってもらい、それに意見のある委員は県教委へ意見を送るということでしょうか。

(中條委員長)

まず、意見を全部本日取り上げていない、それと同じく文言についても、責任を持ってやらせていただきたいということで、確認をしていません。従って、発案されたことは良いのですが、同じ内容がありながら発言できなかったということは、ぜひまとめたものを、本日とは言いませんが、大至急県教委へ送っていただきたいと思います。

それは、候補案に盛り込むか否かはすべて確認を終わりましたので、これから「いやそうではない」ということはやめていただきたい。あくまでも表現上のことについて、ご提出いただきたい。それを踏まえて、委員長副委員長責任で、文章をつくったもので、よろしいかという確認をお願いいたします。このようなやりとりを1回では難しいのであれば2度、3度とやって最終的にご確認いただいたと判断した上で、(案)という文字をとり報告と書き換え、県へ提出したいと考えております。

ということで委員会としては、この回で最後にいたしますが、文章または、文章のやり

とりはまだ行いますので、その辺についてご協力をお願いしたいと思います。

それでは、長期間に亘りご審議いただきましたが、一旦委員の皆さんが集まっての「委員会」は本日の17回で第四推進委員会は終了とさせていただきたいと思います。

方向性という意味では、前々回で確認いただき、あとは他の委員会より細かく確認していったと思いますので、より皆さんの意見を反映した報告書にしたいと思います。

最後に丸山教育長から挨拶をお願いいたします。

(丸山教育長)

今のお話のように第四推進委員会の報告書の提出は後日また委員の皆さま方ご検討いただいたあとでということでございます。皆さまお集まりいただきます推進委員会といたしましての開催は、本日が最後でございますので、ごあいさつを申し上げたいと思います。

昨年5月29日に、第1回の推進委員会を開催いたしまして私どもが、「魅力ある高等学校づくりに関する事項」、「総数の決定基準に基づく県立高等学校の再編整備に関する事項」、「総合学科高校および多部制・単位制の配置に関する事項」などにつきまして、ご検討をお願いしたわけでございますが、それ以来本日まで17回にわたりまして、本当に精力的にご熱心に審議を続けていただきまして、それぞれのお立場から貴重なご意見をちょうだいいたしました。

ご審議に当たりましては、地域からの意見や提言等を参考にしながら、全体的な立場に立って慎重な審議を進めていただいたことに対しまして、深く感謝申し上げる次第でございます。今後は、本県の高等学校教育が一層充実したものとなりますよう、ちょうだいいたしました報告書を参考にいたしまして、県教育委員会として実施計画を策定し、速やかに高等学校改革を進めてまいりたいと考えております。

第四推進委員会の委員の皆さま方におかれまして、今後引き続きさまざまなお立場から、長野県教育の発展のためにご支援御協力をお願いできましたら、と考えている次第でございます。最後になりましたが、中條委員長さん、百瀬副委員長さんはじめ委員各位のこれまでのご尽力、御協力にあらためて深く感謝申し上げます、御礼のごあいさつとさせていただきます。本当に長い間ありがとうございました。

(中條委員長)

本来より予定を1時間ほど伸びてしまいまして、本来であれば、小口委員もお帰りになられるということですが、感想というよりはむしろこれからの要望を言っていただければなあと思っていますが、今日1時間ぐらいいいということで、よろしいですか。

(小口委員)

はい。

(中條委員長)

それでは今、丸山委員長さんも言いましたが、17回の委員会開催にあたり最初のころ本当にこれでまとまるのだろうか、正直いってご心配だったと思います。そういう意味では委員会の進行について、各委員の皆さまの御協力でなんとか一応、形がつくれるま

ではなりました。

本当に特に北の外れから、南の外れから来ていただけたということで、本当に感謝申し上げます。それから傍聴された皆さんの本当に中には1回目から、ずっと来ていただいた方もいらっしゃいますし、それから県教委もこの場にいるとなぜか、あまりおっしゃらないかなと思うんですが、私が、事前でけんか腰にいろいろふっかけると、結構熱い議論を思いを、おっしゃるみたいというのがあったら、ぜひ言ってくださいと言ったんですが、いろいろありまして、それをぜひ熱い思いを、これからがむしろ大変だと思います。実施計画策定で、これからがむしろある意味大変になりますし、それを受けて統合なりというところを出すことが本当に大変であるし、それがむしろ本格的になりますので、そういう意味我々関係を離れても、いろんな地域にいろんな仕事で、ぜひこれからも支援できるもの、提供できるものはぜひしていきたいし、していこうと思います。

本当に長時間にわたりまして、また長期間にわたりまして推進委員会進めていただきました。本当にありがとうございました。以上で第四推進委員会を終了させていただきます。